寛政録

六

昭和五年六月二十六日起草

特別
14
1919
423

176688

寛政録之

昭和五年二月上浣起筆

○徳川幕府時代の探偵の由命を受けること家康も如何にしても支人や同僚にも一切知らせることなく、ふらりと出かけて行くことの如く思ひて出かけるとき変装して者殺を面白けれども、何処へか行くとき変装せしことあるも或時は有名なる物産家なりしもあるいは何人かの用意されたるものなりしかと思つてみたが荒林請負業となる幕府のもとに善しい人が能役者と書いてあるのを見たること大丸屋の二階に変装

最淡

重華筆

38- 9209

の秘密があつて、そこで支配をして来たのだ
などとあるが、まことに異様な服装
もある筈だ、同人の大丈夫と親しい関係がある
が、知らずを傾けて見たいと思つて、恐々
時代に秘密に保存されたる書類
をつて見たを知る支配者
どうか笑来るべし。

○釋迦の生れた印度から、ガンヂのやうな聖雄の
生れ出て其の国民を救はんとしてゐるのは、偶然とは
何か霊的因縁のある譚なる知れるべし。ガンヂは強
烈なる英国の権力に対し、無抵抗主義で邁進し
てゐるのである。彼れの無抵抗主義へ事実なるべく

横原製

力強よいものである。彼れの正義の信念は銃砲よ
り剣戟よりも力あることを考へてゐる。彼れの頭を
小神が宿どつてゐることを考へる。亦彼れの斯く信じ
てゐると云はれてゐる。彼れが前年国内を宣伝
上の為に旅のあつた時、日にかくしいことを思
つて横断の極、断食二十一日の長きを敢行した。
医師の診断も悪病の為め寿命が長い
と言つてから常に一週間断食をつづけた。彼れ
其時医者に向つて云ふ如き言葉を吐いた神の力
を知らるべし」と云ふことがある。ガンヂと交つた、エヤー
ウッド、エディーと云ふ紳士の書いたものを
ガンヂは身体の羸弱の人で六十一二四年の

りきうらいは十字架を見まするうつケ方にあると云こと
だ、彼れが日夜勵精すること南つて倦むことなからん
ことのは、靈の働といふ外いちいる彼れは自から奉する
ことが尊く、奉剛の強いなりを執る敗さくなる山羊の乳を少量に飲
く、今日まで云へる僅こと
み果物をならふのみ)きるのいと少へてゐる。彼れは自
から風つれ裂へを腰巻と纏ふのみで常に全裸
体である。そして四民に自から衣服を與へく戒
を示してゐる。彼れへこんこび数々牢獄に投ぜられ
てゐる。今日とても亦獄中の人となつた。去れし彼
れは少しも美を云ふ事もしてゐるは、その澤は靈
的動心の鐵鎖が始け得べきことのみちいと厚

い信念があるからのまに、実際エデーの母者
と比所の接すると、印度四国の内の肥の北人を蒙軍
することは出来ないから生佛こと為すべきことのみがンデ
が市中とも)る時なるい羊飼が道を案内へ、かこゞの
足痕皆を植物することの繁殖することは仕来て、ガンヂ
が繁殖の身とるんいるるを四時に集まるがンヂの
靈は法躍することを思いさるを得ない。エデーの云ふ
つれ、自分の生涯に於て人を自分の感激を
思つくれることのみとなつてゐる、他の人びすら斯く
感する位とあるから、国肥の崇拝者は尚更の
ことであらねばならぬ。ガンヂが此先繁殖する
とかあつてもガンヂの靈は他の国民と乗り移

第二第三第四のがこゝに起るまで和為すべの武力を以て抗爭する日露戰争に英國政府は朝鮮前に片つけることが出来るか、斯る特殊運動の利益は其の日露の日露戰争もし羅い之れに無抵抗主義をと表面動的に見えて、内實力強ければよいないのである。彼が印度の故世を仰ぎて居るのは決して偶然ではない。

○ふるい雲をとらえ現雄した外人のうへ、未自からの化してきた日本を見れば、彼れが東洋の事いことを示す。

西洋人は大なる強い特徴である事を、東洋人は利己的の特徴と思ひてゐる。

榛原製

紀第一と皇帝を崇拝する義理つぎは父母に孝する義理である。事を敬する義務は自己愛の感情と外ならずかれは、めい紙化さん、雲化さんとすれども、光を日本の後素示唆の動機と考ふることを拒むの間違ひ

○自分の既利益事に扇と就てのみ出るまを言いたかは、近の男行の「美の國」に扇と就て柳田陵山とうふ人が言いたのを見ると、自分の家のつかす黄しとしたものが三ツ四ツある

上棟式に扇車を使ふことも案がつかすれ黄

一比扇車は白地紙に赤の日の丸の扇を開

いて三本の要を中心として親骨と親骨とを合せ集めて丸い軸の形をなし麻を部
を矢形をしたる木材を以て其軸の中央に挿
まして紫檀を設けるのである
扇の部品に種々の名が命ぜられる親骨に
連（骨のもとであるのも稀間扇といふてある
親骨ばかりひろく地骨も同じ扱を受て
骨のあるのが流行の扇の枕骨紙絵等に
描かれてある。親骨が地骨と大いに相違の
るのを殿中扇と称してある。親骨が中
廣で地紙の一部分を残ふものを骨と
称してある、今行はれてゐるのは多くは骨取

中扇の用ひられた時代の扇は婦人持ち
ものだ。
祖扇といふものは格扇の一種で祖といふ語は
来を著はした時代用ひる扇で杉目扇も
格扇と称し法に実らるものが格の代りに杉
を用ひたのである。尚格扇は男子も用ひた
ことは自分の氣つうきうたからうとこの福を
して おくゝいろゝの表五を刺いた者のある
扇会といふことが行はれ、なるべく新婚と数の
ある。
○日本は世界に誇ること迄る者的や特許品が少から
ずあるが、宣伝下手の日本人は一向発揚しない新

学徒でも理科の学上の事は今浅い、愚まつかぬこと
とまの提燈を持つ癖に、世界の驚異である者が
多い素朴なる人風に閑印しもある。まんべんのない
印刷紙でもあることを記載はあるが、新聞紙の
報道でもあることの甚だ稚拙であるの今では西
洋から数十万円の金で特許権を
買ふやうなことが絶えず無く、却つて日本の時
許権を西洋へ百万円の金で売譲する
ものがあるべきない、今其の一二を挙げると名
古屋の豊田佐吉が蒸気織機の特許権を米国へ
武自動織機の特許権を米国へ五十万円で
分譲された。注来い一人の職工が四台乃至六

横原製

台の織機を受持つたことが、北豊田式では一人
の職工が二十台乃至五十台を操作することが出
来るから、一千台の機械を使ふ大紡績の織物
会社でも僅かに二十人の職工と三十人の助手
が女子であるの。電気の方面でもいろいろの発明がある
京都の日本電池会社の島津信義がの発明した
蓄電池と使用する鉛粉製造の特許権が
此年の春百万円で米国に分譲されたのである。此
の製粉機械を米国へ出す時は米国統領
ルーズベルトの面前を通過した、統領ルーズベルトは何
か問題であるまいか、米国で日本から機械を

買ふてどいぬすることゝなれとも不審がつけといふ者の説もあるなれ共、高又丹羽保治郎氏は陸士の教官に係る官兵電気機械の両洋のを淺野氏から有線式三台と無線式二台の設置したとのこと。更らに番光者のと比較さるゝことゝなつてゐる。更らに番的ひいろへか機銃の機関車修繕技術の日本が世界第一で、普通の政羅巴で一台の機関車を修理するに四五日を要する、米国ひすら二日を要する。猶急ぐひい十八日を要する、然るに日本ひは五六年前から五〇間で修理をすることなつてゐる。こんい一寸考へると何んひもないやうひあるが、こゝ計業

標原製

して見ると一年一千萬円の費用ひが生ずる、今我国有機関車に約四千台の機関車があるとして、平均三年に一度修繕するとの計算で、毎年一千三百台即ち一日三台宛の割合で修繕に回ふる。之が為の間に修理が出来ることとすると、此修繕二十二台分けの機関車が工場内に居ることゝなる。政羅巴のやうに六箇月間で四五台の機関車が修繕工場にある譯だから、其の差の為三十二台を節約出来ることになる。そこで機関車一台十萬円として見ると三十二台が千三百二十萬円丈が全く浮くことになる。

経済上容易なる

如技矢であるのに、西洋や日本の技術を学
く換分を来たす事ろいれ、中ゝ露西亜ひの
其の技術伝習の為めに雇聘する事抜群名を招聘す
ることゝなる。今の露国ゝ此ゝ
なることを書きこんだいろ〳〵とあるが、こんなのこ
とは一向ゝ新奇とも見なもしてこうこうい。
○小石檀山の住友八郎兵衛は漆
喰版と云ふものである。檀山の別に長浪義八郎を
画し続くに北斎漫画をもつてすると画中の鶴の
羽根を見へてゐる。細き撥形のものであるが
漆喰を刻した丈に技こゝ刻したものと異つて、拓
痕の細密である。土花の痕をもつて画を刻す

ることがあるが、まだ漆喰版と云ふべきものあらう
かし花の版いこんどこれこれことが無い、誰れか此
版をもつる人を賀して見たいものである。
○加賀奉書の特徴の吟味こえがあるが今
日は加賀奉書の特徴の吟味こえがあるが今
日は加賀藩主前田侯爵家から出いさ
れと知行丸て行ある付けの形今寸一枚を切
れこれいまの頃の特徴奉書の標本とする
べきものである。肉厚で光沢かあるふつくりして春
味を帯び紙黄色ミ染めてあるが、色も
し鮮かである。角合和紙緑寿さましあへれで
あらうかどこゝ鹿いまであらうか。越前

奉書の朱印状）で有名な所だ、また城前まえかな
の領分があったとかから、加賀藩の産であ
ったか紙巧者の人こ別いまくみります。
○先頃宰人（牢人）往来を得た、往来手形を稱し
ますあるとあり、宰人は浪人のことである、また宰
人と書くのは古風の書き方で其の時代をあらわ
すとみる、徳川初期の八公文書にも宰人と書いたも
ので元和八年の京都に於ける武用二十一ヶ条に
武士又宰人不一の隠匿すべきこと、或る刑を受
けた結果として敢浪の境遇あるものを卑
下して宰人と云った時代もあったのだが此の故
浪人流行あるものを稱するが、追々稱号の

複原製

変遷もあるのだ、宰人と呼ぶことの特実があ
るのであつて、浪人と云ふことをあつれと又（）使
ふ文ふるとも兵文抵抗に宰人と云ふ意味を
書き換れと云ふもの。浪人の主義は役義と禄
もないが、先から拘束のあること浪人（浪の掘られも宰人
る意）なきものであるけれども浪人の方が
ないのだから、宰ち浪人とも云ふ方が南部つてみる
だ。
○某書店で発行する政治用語と左の記事
が出てゐる、自分らも関してゐるから、変と収め
てあく。

早稲田大學

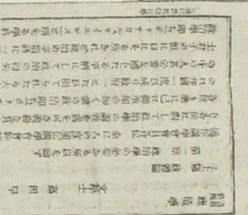
一政治學講座創始の頃

岩荷房吉

我が國に於て、政治學の講座が設けられたのは、初めて東京帝國大學に於てゞあるが、當時の前身たる東京專門學校に於ては、政治學講座の創始は、第一號の巻頭に掲げられたる「早稲田政治經濟學雜誌」の左の如く

「明治十五年創立せられて、東京專門學校と稱し、爾來三十五年を經て、東京帝國大學に於て政治學講座を設けたるは、我が國に於て、政治學の最初なりとす。」

「早稲田政治經濟學雜誌」第一號



警醒社發賣 市島謙吉著

東京帝國大學に於て、政治學の前身たる東京專門學校創立の時、創立に與り、……小野梓、末松謙澄、高田早苗、天野爲之、市島謙吉、坪内雄藏、山田一郎、岡山兼吉、田原良、高橋良一、田中唯一郎、等の諸氏が、帝國大學に於ける政治學講座の創始者たりしと、その人數の多きと、その人物の優れたるとに於て、我が國に於ける政治學の發達に、大なる影響を與へたるは、今日、何人も、これを認むるところである。

今の早稲田大學の前身たる東京專門學校に於ては、政治學の講座を設けたのは、明治十五年、創立の時、……小野梓、末松謙澄、高田早苗、天野爲之、市島謙吉、坪内雄藏、山田一郎、岡山兼吉、田原良、高橋良一、田中唯一郎、等の諸氏が、帝國大學に於ける政治學講座の創始者たりしと、その人數の多きと、その人物の優れたるとに於て、我が國に於ける政治學の發達に、大なる影響を與へたるは、今日、何人も、これを認むるところである。

ブロサ氏である。

氏は、本來、文學・哲學に於て、專ら、政治學の研究に、沒頭せんとせつゝあつたのであるが、當時、東京專門學校に於ては、政治學講座を設けんとの、熱心なる、相談があつた時、氏は、喜んで、この、創立に、與ることゝなつた。

氏は、當時、帝國大學に於ては、政治學講座を、設けんとの、熱心なる、相談を、受けて、氏は、本來、文學・哲學に於て、專ら、政治學の研究に、沒頭せんとせつゝあつたのであるが、當時、東京專門學校に於ては、政治學講座を、

の名展刻のあるのいこん文び可き時代があるの木彫
の刻るこ入つてみる木彫大里天い可き作が
きらしい保し料治朝[illegible]鳴から空のもとに
木彫の地蔵尊い道府共四寸程のものび鉛金代
のものとえらるべき心びで面顔もびも極めて荘重び
作品びある外こ掘出しーの観音立像高さ三寸許
のものに似る点と思はるるが クスりもかつてみて駄
る時代かえるが宋宣[illegible]ものい手法が荒いやう
でもある玩具ま長キメコミ式で顔のみを金箔で
包んだものが四個其内一個い狐の面で時代がある
外四品ぜい木彫の駱駝の墨壺が素朴の品び
越がある。象の[illegible]臥しる木彫豆狸八寸許

榛原製

のものび、円形の木理をあらわし、彩色が施ひた
ものある、外四象ものも思のものへ、或へ象が日本こ初
めて来た頃、珍くしかつた心つ比ものかもしれぬ。根
付は飾りマトモのものみやーろから式印つてフザ
ケたある面いを感する。[illegible]の骨壺底び黄
銅の金の根付を得たことがあるが、北頃紀の根付
を得た、角の出来ものるが、土紙び可き時代もあつたお
もしろいの加納紙製が作つた備べい雅楽の面を二
枚き会へたを刻してある、小品ものも刻いよく刀が利
へてある、刻名いものが共に銀製の銘がある。銀製
の薬箱黒石平の殺の形びで手が附いてみる、風鳳の文様
が刻してあつて粉飾びある。台湾の紀族から宝のセ

其に端渡の所は長さ寸五間ずゝ横七七分許のものにして小西棚のようにして外に土間も若干あるけれども格別利する便宜のあるものにあらず。鶏子人形を料理屋等へ撰出したるものが繁盛の趣にあるも一寸おもしろい。

六月五日記

○智識階級の失業が續出する今日の昔しの浪人のようなものを追懐して又ある。浪人へ扶持を離れて流離の身となるも武士である、いくら糊口の為めとしても武士の体面を捨てゝ武士の内職をやつたゝものである、情けなくもうつたゝ。勿論種々の内職をやつたゝものである、情徒の護身棒となるようなものあるく、高無俗の辯を投じたるもの、別術指南と名称を沿歴をしたものもあり、物品の術いさまざまであるようなるがいくら武士いうから格と高揚格と高揚格でも服の飾かが減ずるようなれば有あらう。時流と人を刺し殺しても財を奪うようなる、高等の業に陥ることを必至の勢となる云ハさるを得ぬ、浪人と云へば紙子を着るようなるハきものを着用をきも市中を横行したゝ、一銭丐吹と又ハ乞丐するようなるものが現役を世間に出ることゝなる世界の手前出来もしないようなるものであるから何人というも保刀の有人であるかくゝ危険と云くハこんなに危険なるものは無い。役者の家柄したゝ揚句、国体をも忘つて、横のしたゝ。甚しきは幕府と邪を陰謀を企

標原製

てゐることもある。西井正雪の運動のときの其の一例と見なへやすい。赤穂の浪人は固体と主君の讎を復し
た。目的が復讎であつたから義挙とも云はれたが、こ
れが不平の為め闕起の時勢となつて会はされた
とすれば、なほ恐るべきものがあつたであらうか。幕府
も或人など仕末に困つた。いろ〳〵の元禄法も出たが
徹底的な追放などしたことはなく。僅かな消極
的な浪人の氏名を届け出させ、妻子を取締
りすることを林大学頭に命じたきり、其原の
廓が彼の等の潜伏不安であると共に、亦指導な
便利なもので、追放の闕起の浪人の思想を
横溢する條件を具へてゐた。闕起業の許の

標原製

を得たやうな仕末である。彼等は常に亂を思ひ亂
を待おこんかしと望人だけの無理ならぬことが出
来る筈天正以来の世が治まつてから投ずべき亂が
り無つたのに彼等は多くの困人で。且つ幕府の政策
として取締が厳大名を潰すことに力を注いだから、扶持離
れの浪人が続々と出た。北条氏の業績を慕つて
もろく、士分の格式で抱まで抑へたから彼等は活
路を無かつたのに、悪事と働くのを待つて刑するの
外手段が無つたとこゝに彼らの無謀がある。幕府
もある時代の浪人の勢力を材としたことがある。彼等
浪人は自から保力を負うのみで無服であることが
つても、常に武士の魂であることを標榜してゐ

不平であつたる相違あり、保し幕府とても思ひ切つた
事の至であつたのと、元禄十一年の幕府が氏家臣
を云つた時の士が自刑の日本人の書のとあるを、
を扶助するも左のごとくである

元禄十一年十一月、建部内匠頭政吉が伏見に赴任した。前にも云つたやうに、伏見は浪人跋扈の甚だしい土地であつた。これを見た建部政吉は、浪人共を一堂に呼び集めて云つた。

「士として丸腰であるといふのは、さぞ遺憾なことであらう。が浪士帶刀は國禁であるから、如何ともなし難い。で、吾等が少々乍ら、飯米を合力しようと思ふ。すれば、余の家臣として兩刀を帶びるに、何の憚りもないわけである。然し、余が召抱へるといふわけではないから、勿論五節、朔望の禮には及ばない。けれども火事、地震その他非常の場合は、早速詰めかけて働いて貰はねばならぬ。これは上への御奉公なのだ。

が、勿論無理にとは云はぬ。諸士の中にはもと大身であつた者もあらう。で吾等の合力をいさぎよしとしない者は、無理にとは云はぬ。早速退散されたい。

そしてその人柄に依りて各三人扶持、五人扶持を與へた。

これは甚だ穩健な失業救濟でもあつたし又一面、甚だ老狡なる浪人追放策でもあつた。これが爲めに、伏見の町は各人其の居に安んずることが出來て、治績大いに上つたのである。

標原製

武士の扶持米やるまでは、御力を禁じ得ないことがあるのである。建部の執へた家
臣は五人扶持を貰ひ、之の扶持の手あと云
かまを得ぬ、とこまる赤一粒の風味もある。戰國
時代の浪人はあつたが、寧日なく戰爭が
つづいたので、其後まで二君に仕へることを武士の道
德とした。つまつた所、思ふまゝに誰の麾下
馳せ參ずることが出來なかつた。浪人もまた
困窮のあまり、徳川の所へ入ること、二君に仕へな
いことが武士の倫理となつたが、なほ上の扶持を貰はずに、
なほ幾分かの一種扶持を離れて、家を流離の苦境の材料
諸藩の中や陪臣家と

とする迄きそうなことも思ふと、浪人も実に哀れなものである。今日の失業者に比べて較べんべきもの無しである。云く得ようか。

明治になってから浪人といふこの無くなってしまったけれども浪人といふものがあった。舊士族で職業かなく、腐敗会で無職となる。神田の獄に居る生さんは。所謂うつ病面々の後に駆る生さんは。西南の役と駆る生さんは。所謂う激義士。抜刀隊をも組んで事の働きをした。その後壮士と唱ふる一種の民が居を起こして政党の手先となる。浪人さんは。今日でも左党のブローカーなる人と称する右翼の暴力家も矢張り浪人

標原製

の流れを汲むものと見られるかもしれない。一時盛視庶の浪人系のものを収容する事であった。今の夫会員つも実に、今の失業者も困阨の極に達さんべ亂民となる迄限らぬ留意を要することである

六月五日

○南洋の邦人の出られる者が多く、さんへドリアンと名つけられて南洋土人はひどく之を嗜む。之を見ることもどうしても嗜いさんが臭まぬ。ひどく誘惑の多いことである。之を買うひ求むる者多くおりとノットを殺ることもも結構。もぬと言ふ、ひどく價の高いものである。その樹を和邦迄運ると云ふのである。性慾を助けることのひ土人

八之丞を始めとして性質と関係のある所から之れを好むと義経とともに付けもするとふ話もある。いちく臭氣のあるものゝ一言につゞくと共の言葉全部を臭氣が漂つてゐるとて、蝦夷人の鼻と称はせる迄香氣が漂ひて、邪人の出入の北の奥氣と云ふと底に香がする、それだけ出人い北の奥氣と慕きつけらるゝのである。兎角臭氣い民族なるう好悪のあるものゝ甲民族の嗅ふものが乙民族に嫌はれることゝ云ふを待たずして此果物をある日本の文士が度唯と名つけもする。

○沽券濱臣の詞書ともし武沽が書しかと絵くらる

標原製

る壇の浦春書の基い稿れまあるこのだが、これまで
でもくらくらくらに、そふ図らずも神のお使ひとなる
れたこと、うゝ知らず書かれもする。
伝ふまあらう濱臣の戯作あるこう、絵彩
色び配つしけれども、元家中宮の絵稿まみを
入れるきやすい思つる、兎角極こと浦の断末
八重中を言葉のめ性の交うることとして、徒
く春書の材料とする人表んこう、漢文と
書きなる同じやうなものある、当代三三
教見しれるがあつて、春書子の教巻の
材料であつた。巳北の巻の河考の
を法字と絵み単に川本とした

たことあるやうな文へと、

○篠崎小竹の自筆の吟稿一冊、標題の下に庚戌七月以後とあつて小竹の晩年七十歳の作が収めてある、亦後に小竹の義子聚が二首を書き添へて「以上三首易簀前作也聚雪湖追録」とある。北宮古い十数の前文の書と並んでおれば、こゝに小竹が徳望を偲ぶ素材の多い、自分の直筆跡であることを審定し得つゝ、動いたが、その後い手る入られ、吟の一冊書斎の宝三日程に出ておるから、自紙五しの巻物の中に入れて表れたこの小竹の詩稿は全然納

榛原製

めてあるが、晩年の心境が、速詩である跡と知られる。墨付二十八枚で毎紙五首の詩があることもあるが、その中首の詩は和まつてゐる。小竹の詩文は大阪の国書俗や書圃圃と彼と分類されてゐるが、高野氏にもあるかも知れぬ。新本と対し比詩稿は全部保存を要する。

二月八日記

○五冊の文化十年十月浪華の輯録せられたもの、清兼の大原左野氏あつて、各氏の名やおもしろく拾かんとして、そこに拾と致味があり、稀なを

仮間を現はして書れが、東京の出版と見ることハトントうく、自分もこれを手に入れようつとめてあるのに、小林氏の好意と保せて獲たことを嬉しくおもふ。

田上記

○過日平賀源内から洋書を師弟に秋田の小野田直武（明陽）のもとに贈り、北の回し頃に北山寒雲とのふ洋書家があつて、しば〳〵茅屋元一郎が手を入れたロレンス、ヘステルの青緑の寒雲の表紙が大いに気に入り、Lapis Lazuli と言いてあるといふのを、寒雲の碑文を頂べて見ると、墨を春西人の飯食に合せ用ゐて書画とを完成し、西人大いに賞異し、相顧みて言つて

標原製

曰く、吾邦の俊傑に樊泥菴と云ふ者あり、長武人と庶幾す（全漢文）

とあつて、樊泥菴を Van Dyck と誤ちべきを心付かず、支那人の名ひもあるかと思つて、きれのを茅屋に伝つて説明さん此。兎角漢学の困ることとスコンナ事が起る、寒雲の外人から比さえられと云ふのは自分から山ウアン、ダイクと称したようなものだ。

○高青邱の編纂官となつて海を渡り幾次郎の話が出た。岩倉公の文書を支那へ出張の公から出た。岩倉公が西洋から帰朝した頃三条公の留守中の政務を

種々議論したが中々大隈参議の切をいろ〳〵陳べたるに、伊藤、井上両氏が財政を主張して大蔵省を司ることは財政困難であつたのを大隈が巧く理論したとんでもの切は決して没すべきものと云はれてみる。三條公は公平の人であるから、北三条公の書簡などは大隈公の傳記中の好材料とすべきものである

○「江戸名所ばなし」と云ふ絵入の小冊本は元禄七年の出版で、ツイ先頃まで三百円といふ高価なものであつたが二百円と云ふ値が出たから買はんとの北吉の輝書は流石に吉雅で元禄の江戸の昔しを見るに及ぶものである。その時の口

榛原製

日本橋や吉原の図は面白い隠れ家おのづからのものもつとも、そこに却つて古雅の味がある　六月八日記

○落魄家　これ種々の エピソードがある、或る人が旅先の無聊を囲しみ十円ばかりを酒楼に登らうかと考へたが、いや〳〵十円は何千円の日当にあたると利足勘定をして見ると無駄を一日の日当を出さうことが惜しいと思ひ直して公園に行つたが、ある人は酒楼の義理を捨てて駄菓子をあるものをゆゝしく情知らずとも云ふべきか、金の残ぶ勘定と云ふべきか、もあるが、大金を去つて公園に行くのは氣つき、護国寺に墓詣を思ひ求めた時、寺の一人金拾種の強くることなかれ、僕を破格又

低く下げて墓地代を定めると、大金はまんで満足せず
更らに実の値下げを交渉する人は、記憶する所の
ること思ひ、海田分の埋まる場所をまんまる使切るま
でまるまいと云ふと、大倉は平然として、こんは俺が値最
後の値切りだと云ふ実を海もある。あの田美次郎さん
は毎年お勧と社葬こ雪を無の時こ必ず、焼
屋のすくめを印刷して、えんを賓無の代わりとさし
こんで渡したるが、多命と云いたいと、美次郎は
がてるく自分は出世の陣すもるから、誰のも彼のも賞
無を貰ひ出すを拒絶することが例である
つれと云ふあの社葬かるべくへとことがある、伊勢
の宿屋もてるく の無駄掃しあひ汽車を乗つて

榛原製

車窓の吹ひ掃くるに非ずを知るものとして拾
ろい上げて之を拝く、乞公に其の人に
其のお使人が赤文の函を受けて、いつもや大限侯に
取登山の部、銀つに非ずを呈纏めて自分ら薬く
て下山をしたのを目のあ[illegible]年の差いのよ
記る似て居ると思つたの大限老侯が社長の部の要
あこ拝えと時、接こ[illegible]提燈の風
を嘯えて落ち焼けるの元で、主人社長は珍客
のあるのを考へたことく、アト仕末つとと大きもも
笑男したことく叫人のるは老侯も驚ひたと毎年
話せえと。社葬の志まり屋の例のまるの跡心ある
が北の死れ原田次郎の如く甚いの銀に白ハる

い、富豪に変ものもそこそこ子もちろく、そして実千第四の産を抵しもみる。彼んへあらゆる財産をブチ込んで戦国法人を作り、一方税を免かること二度を為すとせし利益を図ろうとあった。彼んとそこも時と空の附ちを約束をすることもあるが、その約を果す迄まで数年かゝるから、約束の金が利子を生んでつまり利子が元の附かが出来るまでの約を実行しないのが、彼んの何人でも棄てる主義だ。花まで尺まで迄らるの裂れがウント集まりそうだ。北人が大限度の奥くまで迄ると、茨の四郎の菊の御役者のりの巻甚を出せんるまんと二三本項戴しも四くるが決してもそれを要ちずに保存するから一のちの字宙心湖つてみることをみまれ北人の詩や俳句をやる、さて其の書きつける手帳へとゝろ、最終のページの最後の行まで書きつけなべもまあ。人が贈りよもとも決して仕用することはいろ〳〵こしやッちゃどは破るんは絹ん きるから、殊人と新しいこしやッは無用であつて、ラクダのこしやうちを迄物のは北人は意んに頂逆に自分のやつはこまを裏うやうなことがある。鑑読ちとでも十数年も保存しておくといふ変つたやり方だ。生来出をしろの人が北から、自動車ちでは持たない。自力車夫を働かせる丁寧ちそこそこ幸夫と物ふのび車夫も北海道と侯戦もを結まんバ弟もやらろへとこれが北人の本性である。外出

をしるへからゝいつも富貴の法を考へ他人の別座を思ひ
も寄らぬことを工夫する。そゝろ用心深いのゝ人そんな
る術策を回らすも其手の業らぬ、大原庄方こと四の
かきい、方方金を借り出さうとしたが成ぬしるいのゝあ
の人ゝ二人ゝ十人ゝ敵しなる人ゝと感心もするそゝろ、ぬ
こ遠郷かあると見へて、人の別荘に居つそう、善悪の旅
館とまつても出番の時すると一則を如ぬ元金掃除
を見届け帰ゝ立出らぬ。紙幣ちゝへ汚れたるや
折ぬとあを畳つて懐ろ新しい札を携帯する紙
幣を勘定する時ちゝいの四畳の上ゝ(豆くことを感
し白紙を勝て載せてそろけんゝ数くるいとそう。守
銭奴の標本とゝくゝ北人ちゝどがそんゝであるかもぬかが

横原製

就当のそのゝ云いたることゝどこか感度しゝ京がちつも守
銭奴と呼ずるの誤解とゝ弁護をしてみる。北人
の就書こ経つて産を心つそう貴境を拵し
ゝたるかいくらもある、海の池や井上候や大隈侯
ちゝいの話北人のお旅を豊つてみる。老かし北人
ゝ任かちゝと自家の主張を立てる)す者の歴
迫するから、そゝろ〳〵幸抱かしきんゝ住ゝといあ
ゝ〳〵へてみる。北人ハ石橋をあも(赤儀ゝ日本銭
ゝ金を預けしハちゝぬゝ、北国の就別ちゝ記ゝ
あるゝ〳〵へゝ。

○六出上人ハ其の詩集を題して云く

得詩莫他視　吹毛祇拠喉　天下求知己

莫如己自知

元も確かに一説である、自家の詩を愛するも生前之れを刊し、動もすれば産を傾けて手ひろく刻費を惜まざるものがある、人の詩を隨筆を笑へばこれの詩まれに知己なることを思へば一概に笑ふのみならざるに似たり

○東台の高技に出つてみるに、西郷隆盛獵犬を曳くの彫像、日本の彫像の如き早き出ひあるが為めに作りたる犬は日本種にて犬ひあることは、この人一見知る所であるが、西郷の愛犬はセッターであることが知れたのは流石に初年一瑞西の公使殺の記事にパウルとしる人が初めて、此人の後に書記官を罷めて、横濱に帰り輸入のアゼントをやり、後に日本に渡した人ひある、其の在官中一日本の大官に交つた中に特に西郷と親しく、西郷が獵犬の圖を描くことを前に十年の前のことなる前に、パウルと別る時は自分は死まで行くのだと涙を流けれたのの事を番曲に作し、親の親の関係がありてパウルは番曲に作し、獵犬を描くことを務とし、何か常にあるものあることを務とし、切に自愛を西郷、新の、其際にセッターを西郷つれ、其犬が西郷の獵とする為に作の人は、西郷の犬を深くるべきであると、柿園の年に

祭つた。北のパウルの親娘は和南の教育があつて大津絵に趣味をもち、古い万柿瀬に
なびいらく由もしても四の国家、何の
貢献を志したるとか学くか、パウルと西
郷の紀文大のこと、北のパウルの語り侍ふ
る所である。

郷人らし一二の杯を宮のもとに。一は良寛の手鞠
を擬した番会を忘つたとて、五彩の絵が鮮か
な施されてゐて、考えとしてはパウルと見へる
いやうな出来ばえ、勿論西京の陶工の仕つたと
て祇後の工人の心ばいなるべ。実は良寛の手鞠
を模すまでるべ五彩の糸は祖母のしたかの人

標原製

林のようであつた。良寛の手浮
の手鞠の存ずるのを見ることのできる程
でもあるから。北の番会は実物を示寛
の遺物を撰んだようなものといふべき。保し自分の
小品柳と四五くらい寧ろ恰南のようである。もう
一品は誰が袖と表紙のある小冊版本で、安
政年の書写に係る。徐ろに三枚あり、一枚は表面の雪
を集めたようで、徐ろに三枚あり、一枚は表面の雪
景を書き、一は新川前掃けの図かあり、他の一
は庵と庵と女人が接吻してゐる図かとんへ美の
頃、口火紀しを達庵の形の銅瓶が行はれ、笑ん
が熟まると口から風を吹き出す。よびあつた。掃

吻だけが書上の働きで必ずの和の国揮毫をもて
あさいしいるびある。伝説は多く考証并に巡卿
の業績の他で僅に一向ころいがこんなふ
は侍のうちへ入れて迎も都なの書庶を渉うても
獲可らざるものであるから笑つて其の賜を
受けた。

○国々の印章中者の技倆を得る為に後に参した。十
二日は清酒奎吏伯が会の宗家を訪問するといふ自
分は親族として斡旋せねばならぬ。宗家の
嘱を受じ自先が宗家を訪ひ、宗の系の
人を招ぎ、宗家の舞師地志国に於て
懐旧談を試みを貴し、其日書は新聞と載せた。

樋原製

四日まで六日の北海道の五十年祝典に際
した。兎角世間は自己の老を感じ易いものだが、
前の記録を迎へる人は八十一歳の老人ひあり、故
卿の系とは自分の印時代のまを語んとの注
文で六十年前の舞台と潮れ、くなつかしく
思ふに於ては亦五十年前の昔しを回顧せ
ずに譚じ、左野右顧兼老の域に脱出する
事の文であつたが、考へやうで信つて自己の老
を欲せしめるよう寧ろ其か年齢の未だ老こ
すること迄らざることを思はしめたのく、伯爵が自分よ
りも十年老のとみることが出来て、自分は嬉しく
みることであつた。故卿又は於ては六十前年の舞

を強うして風を揚げ味噌を煮る雪丸を戴いし外面
時を思ひ出せば十年計りの小兒にうろ覚えに覚えて卿星
すい紅葉段時代の同窓が三人まで者存命
で先が何人か自分らも一二年来しもあることを
知つて喜ぶを強ひらるめられた。北海新報の五十年
を祝する社でも自分の創業が恰も自分の二十
年頃無の時であることを考へ及ばさるを得ざるの
比。其の往年家に現社長廣井一兼と川上清
一郎の諸君早稲田開校当時の有業生が其齢
自分らも多人の若きを強使を与へ譲遇近
年百人中壱の新味あるものを選べて
自分の強使を待ちを得無つた。

横原製

負今の話りに中のいつも酒攻めと揮毫攻めで日夜
十二時まで寝ることが出来ず朝は去時
に起きて揮毫をせねばならぬ苦しみとなる同じ
く揮毫は三日間で百枚に無人となるものが
あつた。先が亀低狂書書画のうことき小品が
あつて、随分焼けいことであるのを平氣な
者つたのは此ことを考へると自分の強使を自覚
するに充分であつた。卿四の情味は先て益々感
することあるべしめらるべし。歩々訪ひ来る特に興味
を以つて接し、家人と時間の許す限りを談笑に
暮し此度は可なる忙かしいことであつた。去つ者と此
度訪ずの祝賀と所謂する或つの会と出張も

外に臨時に倍されたる早大の校友会なる路人、朝来
京にて著しく増加せる四編集とを一日にやつて
のけて其疲れ甚に来て出勤したる老人もこれ文
稼げば若い時とかしも)ひがあるまへ。
世の中に時のまに北越新報が五十年紀念に際
ふ南日、新潟新聞社の其社長平松庭那一郎
をなつかれ。再び社会に余深甚の縁故があるので一喜
一憂の歎きを得無きを得ざりし。
自分は北越新報の祝典式場に於て新潟紙は春
の歴史であるから、新報社は五十年史を編
纂する筈であるとの其功の偉大なる一年三百六
十五日、毎日一枚書くとしても五十年で一萬八千二

藤原製

百五十枚の浅薄なる歴史である。況んや新潟紙
は四頁を出すが例であつて、八頁を出す其の倍数
を出すことも多くある。現に北越新報の現在は八頁
を毎日刊行してゐるが、後には四頁毎日発行する
とした計算すると五十年で七萬三千頁
編輯に翻訳で、それを牛馬車毎日二萬有餘
印刷頒布するとすれば十四億六千萬の
紙を要行したことになる。実に大量である。中
さ何ぼ高くても、恐らく十四億の紙は富士山を全部
包むに足るものである。
紙が五十年を中心へ(ゆ)くうちに、新潟
と、或る時代まで新潟紙は収支の償へないよう
な困難があつて

定まりたる北条のことなれば、北條氏政の秩父陣のみを其陣のみあつて、終始往返するものさを得たのハ異例であるなどと云ふ。

卯里の家に家康の旧邸址天桐山と呼ぶ所の唱くしみる所ある家康の別邸と今伝へられ土地の老ハ余を迎へ、北面ハ畑と金子の歳魚を出すこと、ひあるの卯

葉ハ良の為に、北面ハ畑と金子の歳魚を出すこと、ひあるの卯

あるなり、戦争の年前原一誠や奥平謙輔を余の家に招ぎしことや西郷孝弟が余の家に寄宿したことや在形当一(後)が余の家の大矢

家を訪ひしことや在形当一(後)が余の家の大矢

ることを来訪、余が為の陣屋と為して主家を

受けたることや、弘業銀と白壁堂堂侍士と白へれ

のことや、弘業の銀が手狭の為め陣屋を移したことや

どを法じ、勝手の為に三ヶ所に余の弘業銀行の

旧宅が三人あり、北の方に三浦家、春の

末の秋義、関谷、久保、鈴木守雄、ちが皆ま

じ居命じあつた。余の流しの為の星屋侍士

の方を豊城といふ。澤ハ侍士が外城よりみた呼

の命名で豊城ハ下ヒロ、と和訳ヒロ出来るが

実ハ後漢書に豊城剣と鍔郎の刀の埋まる

所あり、支芝の氣を放つある無故から自らを

鍔郎の刀に比し、あたら名刀を四金に売ちさす

ことハ惜しいとつの宮殿のあることハ同宮者

七時妃のと共に所ちとを何人も無と入つた。

自分は出中の人と交遊後淡を交へて●用伐とそ
西家いの系の人で、高橋朝雲いそのつゝである
とを知つた。池田新村ハ系らと自己に感と鏡
をそそ来たとそ話が傳ハてゐる、えんの自の
の疑いがあるが墓の四方の墓の碑
山口坂山の我々の誇りとすべき美なる者ひあるが或
う人いその手記の小本二三冊を齎らし来つて示さ
れたの外城の八幡こ金ハ外風雅美雅が坂山の
書上ハ自氏の名を得ハ親面が献せうとあ
宅れが入る者存ずるかと問ふ所なる者との答聞
とし。余ハ初時素淡の師ようし鎮護寺法印
華田の淡こ移り、北僧の和定ハ寺ハ屋をひらき

赤池田の家
ハ筆
筆原
ハ分

おり手
僧の妹が主ら賛してゐるが、えんハ男髪して髮髮
小男髪の結び髪を振つて表勵こ智しに変形
ひつけこと多を必へに、初う初時弥とした同屋
一点の消息を少きえんハ今業を廣したとの答
を得ハ今の世の中ひであることを初めて知つた。前
帝工城が城後府左任中業しに詩帳を示しと人
かある、雷こ居ハ余い春巻淵めて髮ハ筆ハ沿ハ左の
めくりあつた。

丙午山墨夕陽釣　陽岸洞　頭帶雪
花悔一自関世　子晃時式　冠五四方
己未二月　秋七つ花生　涼一

自分ハ田宮の先輩と前原と妾のあつたことハ遠藤

四四の田に無くて此者荷の物かであるか、あの家主任中前
条の田うえを何の家と宜きやうや、前原の金の家と宜
やうも無きやうにいふとも、さうさうしと云き紀しやうも誰の如
ことの無かりし或は此つぶんと云ひ度うし料
立て実非家うとも宜きやうしかの金の酒次北の天
神山の畑を任せ程ひ苦々佐ふまることを云ひ
今ともに三十年前家の前主人が初の頃より二三
反低下したと云ひたことを記臆するが、今来て
見れば いつもやまれ時くもの高く低下
しやうと思いうと云ひしまけやうの主人も平生氣
付ずるきしかの高くする迄に佐下を見ると存
ずの。無言心寺の徳龍の侍あべき事の偽ることを語て

榛原製

やうに村上雪精の物うて此人に此事しやうとの云ひ
の初めて笑く所也、只童と涙を交ゆるの無味の氏迄
に昔り金酒次故山と相つてその所盛を除し宮終て
宇佐見源の家に宿る、先人若八の金が弘業飯の
代の田宮うう、夏のき待遇を受ける事とす
あ原の宇佐見母の者めて念仏絵かれ口を一番
けれ池中一弊華を弦ずるとも稲南侍
が孫しやうに言葉をもしても物と聞う、北婦人い念仏
住者ようが為也、亦あ原と一人の仏者宮田有と張
味ある人を義と保田の漆山大愚の一族なる漆山
類流といふこうとうう、男金ん孫らしき稀觀
の田吉もまく老母五程を示さんれ、北

人余が隠棲の意味者すなわち北次の隠棲ハいつ出るや其の如時めすらどさまくの質問も出で、彩
さ早く生涯せんとも住さんと、亦特と国吉と親
も余の知識を傾けて一冊の著書を著りす
べしとて起心と慈遇きんとす。
郷堂と彩和の君と相思れ相しと知人ハ一すらも生ぬ
施公義興隆と其弟恭三と余が親戚で無性と弘業
彼と同じく之が、東京で自分の如人の家と宅の方し
比石星庚次ハ貴田東仙の兄で弘業時代と最も親
しかつた、冊美堂三ハ余が母方の分家で余とも弘
業後、宅の居しに、この人ハ余らと三の兄祖の志者で
晩年迄交つた。去谷郁雪渓と云ハ山口の某寺

の子で同宗中組親ぶらく其寺と絶入ることを
恐れ出す、言郁竹兵衛と云ハ有つた其家が自
分の家と行う彩和の縁因があつて、よく招ぶれたもの
家の母と親待を受けた、ことや、自分の先輩株れ
あ孫子石大与や明田文花氏がみた、自分ハ高田
訓導を目の当たり此時又未だ春の詩を言のもられこと
があつた此が、支けば春孫子ハ貴侯の為めの猛先を
撃けたとやう、小田島儀一中ハ大人ひあつた此が、家た
う拾いず、古い方故泥生活をつゝけた。郷土史ハ
此人が最も重しく且つ多く材料を集めたと郷堂
の語るを聞へた。星直弘と云ふ神宮の子があり余
の同僚の師又鶴田圓治と云ふがあり、中津玄仲

と云ふ医家の子に風儀と云ふがありたること、原元春と云ふ醫家が家庭教師として余の宅に切り来てくれたがあの人も星屋つづもあつたことを想ひ起す。阿部貞治郎は矢原出身の武官として大佐に栄進した人で矢張り星屋つづもあつた。日清志抜といふ矢原の人びとの集星屋生[illegible]白根のことなど矢張弘業録の事柄なる事柄なれども今も存命であるかも知れぬ。記臆を辿つていろ〳〵の回顧を想ひ浮べると云ふ事である。てが居る矢原の男とうつるもの、僅かに存してゐるのは渕谷鈴木三浦と余と四人位で、これが皆七十を超してゐると思ふと、坐ろに感慨にたえざるを得ない。

此行矢原校の為めに扁額の揮毫を托さん、黄原神社の為めに扁額の執筆を托さんとの事校七来の復命があつたけれども黄原神社は自分の家が社頭にあつた関係もあるのだ、其と辞して宅の上嘱と云ふことにまつた。

六月十八日 志ろすけ

長谷[illegible]氏の紹介で[illegible]の北海行脚の親戚の紹介で[illegible]の[illegible]を法[illegible]と、此等親戚は[illegible]の祝賀[illegible]自分も一場の演説をなす[illegible]

昔しの[illegible]駒が出[illegible]人心[illegible]

[illegible]が出る。[illegible]

大谷川時雨と云ふ世渡り[illegible]

流れ後家が印刷代を拂ふ

ちへと云ふので余も所謂を捉へたと大笑ひに都の
人有力な記事に掲げられ一向に花前のことである。
こんな事実で余が社会に出るか時期を
所謂社会に文学界と称する自分が
社もあるのに、新聞紙面に文士文士を称ふとは
意に無味を有ち種としたのであらう、此の記事が各
此の記事に特載された世評利害の評論とする
ものの人員合はせの事である。但人は時勢といふ
一面の流れである所は年長る時勢が中
の如き趨を補ひて文義生活を営んでゐる、その経
は誰れあらう。今は説界と羽振りのよい三上於菟
吉氏の時勢に新しい世評もあるので

樋原製

美が所一こんれと云ふので、そう見ると、まよい第味
だとそふいふのが少きいとふ、冒頭も交てみるかも知れ
ぬ、コレ式の記事が多くの一種のセンセーションを惹き
起したことは余の喜ぶとする所である、方今の世相
の一端を語ることもしも意味深き者とつく
○劇の任管家である三遊亭花の結婚式と陪席の統
時を劇に加へたくての余の祝辞演説は三時から始
まるとの紀念撮影を終る頃に取めんとあるのでいつ切り接
き左に収めておく

早稲田大學名譽理事

市島謙吉氏

私は、臨時に驅り出されましたやうなものであります。蛇足を加へるだけのことゝなるかも知れませんが、實は、三島君は早稲田大學出身でありますので、誰か早稲田大學からも出られまいかといふことから、高田博士が差支がございましたので、急に私から何か申上げなければならないことになりました。御迷惑ではありませうが、暫く御清聽を煩はす次第であります。

私と三島君は久しい交りであります。君は、京都の大丸の主人と同窓であつた關係から、大丸に入社してゐられた頃から、よく存じてゐます。それから、君は外國に游ばれました。其時は丁度歐洲大戰の際で、君が歸朝されて大阪に來られた時、私は君と同宿した。君は英國から多くの戰時の

朝鮮總督の田植

大阪から本社電送

【京城發】農民デーの朝鮮水原農事試驗場では去る十四日午前十一時から齋藤總督、松村殖産局長、有賀殖銀頭取などお歴々をはじめ五百余名がワイシヤツの腕とズボンをまくりあげてにぎやかな田植—お師匠さんは試驗場の江角技師、齋藤總督も一束々々、丹念に植付けた(向つて右が總督)

ポスターを齎らして歸へられたのを見て、面白く思ひまして、丁度其折校友が多數會しましたからそのポスターを借りて自分から借越ながら、如何に此のポスターが面白く出來てゐるかを說明して却つて三島君を傍聽人にしたことなどを思ひ出します。かやうに種々の因緣もありますので、このお芽出度い席に一言したいと考へてをりました。所が、何か申上げなければならない高田博士が欠席されたゝめに、私が圖らず其機會を得ました。先刻から、段々いろ〳〵の祝辭がありましたから私から別に申上げるまでもありませんが、聊か蛇足を添へて見ませう。

三島君は目下大谷君のところに這入られて、劇場に關係されてゐられますから、藝術に因んで思ひ寄りを申上げます。一體、家庭を形造ることは一種の藝術であります。近頃の外國の學者は、さう申してゐます。家庭を形造ることが藝術であれば、丁度これは芝居のやうなものである。芝居に凡作や傑作があるやうに家庭を形造るについても、凡作もありませう、傑作もありませう、事に依ると、駄作も亦たないではない。ところで藝術にも樣々ありますが、丁度芝居のやうに、家庭は合作藝術であります。御承知の如く繪などを描きまするにも、一人で描くのと二人三人共同して描くのとがあります。後者は即ち合作である。芝居も一人でやるのもありますが、多くは「シテ」「ワキ」が協同します。そして其のむつかしい所以は協同者の調和にあります。一人が勝手次第に自分自身

の呼吸でやるのなれば巧拙は別として案外樂ですが、合作となりますと、自分一人だけの呼吸では行かない。他人の呼吸を、すつかり呑込んでこれと調和して行く工夫がなければならない。それがシックリ調和すると、そこに一種の立派な藝術が出來上るのであります。家庭は芝居と同樣にどうしても、二人以上で拵へなければならない性質のものである。乃ち夫婦の合作でなければならぬものでありますから、和合を缺いては成立ちません。夫唱婦隨といふ言葉は陳腐のやうですが、どうもこれが大切で、人體に譬へれば、良人は外部の事に當るから身體の前面で、夫人は內部を司るから背面である。表裏が折合はないで、良人が右せんとするに夫人がそれに應じなかつたら、半身不隨となるやうな譯で、圓滿な家庭が出來やう筈はありません。そこで何よりも夫婦の間に大切なのは、互ひの間に一點の曇りがないといふことであります。互ひに疑惑が生じたり嫉妬が起つたりすれば、そこに結合が緩み、碌な家庭が出來ません。

三島君は、偶然か運命か知りませんが、劇の畑に投じて居られますのが、家庭を形造る上に結構なことゝ思ひます。家庭の合作藝術に、いろ〳〵の教訓を與へるものは劇でありませう。三島君は劇の事業に身を寄せられてから、既に相當年所を經て居られますから、此邊の事は充分御理解があるに相違ない。君の新家庭なる合作藝術の將來については、恐らく少しも心配がないと想像し得る

のであります。仄かに聞くところに依ると、強ち、三島君は、今日初めて家庭を造らるゝ譯でもないと承つてをるのであります。既に經驗もあらるゝであらう。全體君は頗る世故に通じ、如何にも圓滿なる方で、世間に交はつて行くについても、亦た頗る巧妙な人であられます。その新家庭が圓滿であるべきことは、疑ひないのであります。先刻、媒妁の大谷君の御挨拶の中に、劇の事業は深更になるから新夫人にはお氣の毒だとありましたが、實はそこが試練であります。夫婦が互ひに信じ合ひまして寸毫の疑を挾まないとあれば、夜の遲い位は何んでもない譯であります。三島君は舞台の人ではありませんが、舞台では夫婦喧嘩を演ずることもあり、他人の妻なる女優と戀を語るやうなこともある。それを一々嫉妬の種としては溜りません。私が劇から家庭の教訓が得らるゝと先刻申したのもそこらにあるので、芝居で夫婦の男女優が喧嘩をしても、夫婦でない男女優が夫婦氣取りであつても、そこは芝居であつて、樂屋へ退いては、光風霽月の如くであるのが大なる教訓で家庭もそれを學ばねばなりません。充分世故に通じてゐられる三島君が、今日相當の年輩で家庭を形造らるゝに於きましては、どうかその新家庭が駄作でなく、凡作でなく、願はくは、傑作でありますやうに、私は切に御願ひ致したい。また、かくあるべき事を確信するのであります。〔拍手〕

の閑に乗じ坊間と図書を漁る僅かに一二を得て帰る

六月十九日

一 促織経

支那宮本蟋蟀の形と色の其他を雖しいろいろ書籍に書かれ蟋蟀を玩ぶ限る外別に公衆の私の楽無色の説来比較しかるに宋の愛玩慰娯徒綱紀を著わしたる形色始めて詳かなり、此書形色の外養法蠱病、闘不闘等を挙げ巻尾に異虫三十三種を附す、蟋蟀の研究極改に達すと云ふを得べき歟

横原製

一 柳の州文集　九冊

此書は府志山家の著なる山氏の印記あり、志山は南の手写と傳る由最後一巻は山瑞侯の手写也拙斎の文柳を物と私淑するの説あり、府の学者は図書を手写するの慣習なるこれは文を学ぶ者特と手写の労を厭うなり、完し金山氏名家の手写本を蒐集し力む、是れ点灯一也、刊本は容易に獲べし、好写本の獲易からざる也

一 百蘭詩爰譜 二冊

文美角の上梓に係り張和亀の畫する所也、余前年初版特爾の此書を得て珍蔵す、三四年前若金部を変し如し時俳句を唱り今は無し此書絶版の印刷も既る者と云へも詩爰の輝本と為すを得べし

○自分は漂流記を読むことを嗜むいろいろの字を後んでみる漂流者の辛苦は大抵共撰を一すてみるが石井祈昔が往年出版した日本漂流譚(二冊)の者も譚とするものは漂流後中の異聞であらう。これは元文四年五月無人

標原製

島に流れ寄せ一年目に帰来した遠州笠井筑山丈兵衛船の模文甚は水主仁三郎平三郎の三人と此等三人が漂流中同じ難に遭ひ漂着した江戸湾沿岸の事も美人の漂流である。無人島に流れ寄せて天水の雨の恵みを吸ひ、食は禽や魚を捕し衣類は禽の皮を用ひ火の如き絶るとき附りの火山に求め或は難破船の漂流着に積載の米を獲或は漂着の帆や板の類を元り上げて種々の用途に充て一つの鍋一つの釜は推の帯一つ以て二十年用を足す、金銭の如は絶対に光安なるく、銭へ打ち銀貨は鋳ひて唯此形を存するのみと雖も有るが、

漂流船を見る米の四トモ〻の一隻あるを発見し毎年耕心して義午の収穫を得たりもあるも其の折節い死からロビンソンクルソーに酷似する事あるを彼んの偽托なることを全くの事実なるを吹上の法庭の文面を基くなる者数を記して見るを毫も作り飾りなく、口供に明なるのみ、理こかなくり、さるをもよくも二十年の長い星月日霧命をつなぎ得たることかな、こんと伝えも人間ハそうそう死なぬものと思いんとう、二十年の間一回と雨身を托せざき船のみ(思)を見ることもなく同し運命の十七人が漂着し、えんかわ舟を持合い[illegible]無く、ち角も弁も無、運命を天に任せて漸やく八丈島に漂き附きるが救命を得る所以は此の漂流譚ハ為に出色の興味を与へること也

六月廿二日

○宮内大臣一木喜徳郎の次男が帝大の教育を受けること極端なる危険思想を抱き、ブラックリスト中の要注意のこと知るべし、へいかあの確実の記もち、殊に宮内省に奉仕する者の父子兄弟あるとハ国家公理が忘れきるを東洋自由新聞を自由論を主張し、そして其の兄の徳大寺実則ハ天皇一味と同じ位地にあるもいとうあるも兄の身請を容れず、終に勅命

て新聞の社長を退かしめたことのあることを思ふと、支那のような譯もわからぬ、当時の自由論者やはり危険思想と云ふ(ら)もきへ。

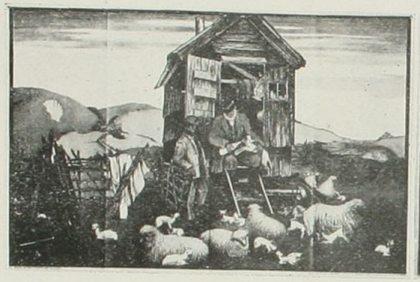
○不景氣の世界共通で日本の又が見こ国民びのるの又でるい、失業者の續出何十萬と数くるので未日本の又でいるの。二度と社て国産愛用の標語ハ各国の中いんとるる。左る收めたポスターの言まい子斉土改革が迫ってる英国から齎らしの一端を見よ。

○土改子の淡い英国こ主流る壁紙を米びするので見

の工場を又と見人とが容易さ見ることを許さんるるつ
つんヤット見ることが出来、その後る入るる先に自ら、
多分今迄で二三の標を出しを示さんにのを見て驚
ろいたことといい、又人ハ皆る日本米びい大阪巴屋の紙
であることが高標で知んに。今迄の重役の方のる
英国の壁紙ハ金唐革を模しにものと呼べて
あるが、実ハ其の時ひどく珍重さ
れにのに、此も倣ふことさるに惟に異るのハ
ころから機械化してあるに中のことにふと
あるが、二三十年内に立産のものを示さんにのを又る
と実こ立派のものであつに。元角日本人ハ車屋
で、漫りに外国を羨し、外国の高標が貼

つてあることを表ぶが、何んだか知らん、吾々が家本元であることの決して解さうとさうでない。よくやく
流しとか外国と日本産である玩具を土産にする
ちゆへりの地への笑を誘することのあることを。此
頃は西洋制のを工風したものが、日本人は西洋の鍛
法の後つたことのとかび、西洋の最上のものの較べて
一二等優良な世界に誇る値段があるそうとかい
きんハボンと名つけられるものと。
○赤裸不逞人が以来頻々数十名宅を殺傷すること
のある者多、警視庁も一種の武装を工風し
チヨウキ銃すし繰かとひらを着せることをしと
此のクサリ、カタビラうきい真鍮のやうなものが装し

HELP HOME FARMS. BUY ENGLISH.



The Empire is still in Building

"There be of them, that have left a name behind them, that their praises might be reported."

"And some there be, which have no memorial; who are perished as though they had never been."

あつて、鉄丸（串刺）もずい、刀七通らあるそうだ。者は
目つぶしを指の間に帯をしめることとしてあるといふが
こんい目こぶるあるとすると利那に流が出で目かくらむ
とこの。戦国時代のものがボツく戦つてくる実こ
拍子抜けする世の中である。

○近来外国で犯人の刑期満了釋放する時まで
表朝するといふが、これハ日本も倣ふべき法である、悪
人の子い必ずも悪人ばかりあるとも限らないが大体ハ悪
無統のあい花嫁ばかりあるからこんと同じやうに、顛狂
や癲癇ものも出来ないとも。文化が開け
るに従ひ比等不幸のものを保護する傾向が
ある。悪種の多い社会の癌であるから、公の

の為めに去勢を見事とする

○西三の前稀書家六四郎氏が訪ねて来た。氏が

老人と河市まる二十年の点に入りみるが、訪ねて来たの

は此の外此の外である。亜酒も出来る限りの歓待を

す、酒次藝術論に及び、余の傷んだ藝術

は未だ極限に達せず、生硬を帯びる由あ

ふれりとしたやうな味のあることを特に言へり。

六四郎は日本の三絃は墨絵のごとく、淡泊

な音に特色があると云ふ。余の考へでは寧ろ

世の常の音曲に投ぜんとして三絃

の特色を失ふの変化を為すの不可を云ふ。

六月廿二日

樺原製

で俗に耐ふる時期があるとのを示して、これが都味的

の時期であるが、チヤンと考へるとすると

時に時期乃ち蓋し変の狂ひのうへに立つ今の文

化の生んだ時期ともいふ。

機械美術の世の中でも、機械が音を出す

のを防ぎ得ることは、文化の極洗錬の

極致に達したものと、砂時計を賞することと共に

三絃美を揚げた。六四郎は自分の独奏を淡

々として酒の強く臭の中にも一冊を無くした。六四郎

さい敢て云はんとも言はんとは、宴果

ら無と駆らんとも、兎を抱手に同伴のあこ紙

後猫子を喰ハセて寝ま稼いだ。あとで聞くと聴けば家
今度ちゃんと自分の近の強くこと　ちゃいトンとあい
全く破格のこと　此、傑作、驚異、驚くべき強
く時ハ、いつも出まかせ勝手な強き方、伴奏ハ頑
る難いと云ふ。此の此日見の紀念樹を庭に植えてもら
つたり、紀念写真を撮つたりして楽んだ。こゝ
る収まる写真ハ前の六畳方に一人を合せ
後姿合を催しに拡大、六畳が拡しに世世で
を見ハ撮影　此のである。

○空ハ遠く高か永草（行骨とおひ）を畫しる
幅夏の抜抜くを涼味ある、金の園中の此
ち）へハとを特ひ入る、遠谷橋に二のび葉枝
お似るりをくるぶ人格を橋山を涼みけるか

後姿を眺めさせる。あとで呪ふも聴けばいい。
今度ちゃんとうちの子の強くなることをどいつとちゃい
全く故障のことば、厳しく感じられて陽
炎が頭
でもち
こ
と合
壮

○空の色は丈か水草（行屋とおひ）を畫しる一
幅夏の物抱くも涼味あり、金の風鈴の沈黙
ちゃへやとも特ひ入る。色谷椅子に坐のび筆の穂
おいるるやうなる人格を椅子を涼みけるか

書と前後のあるに表ぶ可し、但此價の割合と言き
ハ婚礼を躊躇せしめんとす、概して新書のよき
ハ高し、此答も実に新書として論ずべきの
うんぬん、移さんきをよる駁べんへ板埼氏、坊拙の
論ずあるべし、投価の如き敵する現ひの作家の價ハ
殊に自費のけんぶんとう、幸と此時世中のうちとして可
此媒氏もなる夏時世中のうちとして可
也

六月廿四日記

つ矢教莱中左の二書を接ス、

一 百拙和尚典座教訓 一帳

漢文 正楷好る長文、淡泊が神君賛記

十六葉を書しるを欲するの文 豊公の

偉動を挙げ其の今い遺廟に荊棘業生
秘帰鳥悲くの哀んを以て栄枯盛衰の常
なきを概し、淡泊が神君の事業を賞揚
するの偉と明合するの外一篇の大文也

右 復上

志岡安公先生 文机

泉谷野納 [印] 元養和百

と肩尾に有るまん百拙名元養字百拙
弾勤雪又元椿洛西法花寺開基寂
延二年二月十三日寂享年八十有三

一 萬治元年刊 去原細見図 一張

北細見図今稀と称するものも、慶応元年八月
文政二年時代古きし、間口幅三尺許
竪五尺許のものなれども、吉原各町を区劃し、
世俗単に廓と唱へ、西の名を称すること詳かなり
大門口の左手なる大門四郎兵衛と大きく書し
左方を番所と称す、大なる格子四軒位
右方の、（長崎屋）（吉野屋）（伏見屋）（玉屋）
（長崎屋）（吉野屋）（伏見屋）（玉屋）
茶屋名なり、唱へ廓の総数二千八百六十八人
内遊女三人格子六十七人、同三百六十五人
次の印千百四人、唱へ廓の数の凡そ千
三軒、揚屋十九軒、茶屋十八軒とあり、

○余印癖あり、多くは人の私印を借りて用ひ、
後風の印も花鳥、唯と家に称する家祖伝の
名の印数顆あるのみ、過般新調せる印の寸法
従来用ひし印と比べ、花しかも一族の印
を兼ねしめば、余と改すべし、余嘗て之れを保存せん
と、其の言に従ひ二顆の印を造せり、門市
時子協の印を、市時鍬太郎の所為に係る、余
の意を体して鍬太郎

荊川高弟倒

益田勤也刀

余印は通称次郎八協庵と
称す、別号、磊軒、又
赤壁といふ、所謂四
の人、然海名の白雪

の子孫、試みに五峯の北游詩稿を検するに
左の記事あり
協庵先人の時、溝口侯の用度を辨ず、
協庵に至て益々力を供給す、賞賜
屢々かうむり、待つること優礼を以てすること、冊
明思亭嘗て協庵を称して曰く、性剛直
識大、切に[illegible]すること、是を以て
風を卿堂の為め信れたり、凡そ大事
あり衆論紛起すること、協庵至れば一言にして
決す、市政或の諮問するあれば立論詳
すべし、言皆簡にして、いまだ嘗て[illegible]を好まず
山中間の二年と三珠樹の称あり、（中略）最

も美湖原松洲と親善、家の近き
花書竜巻、志の如き、力のきゝの偽らんと欲へば
重價の珍物と異も全快を奉けて之を償
少も吝惜することなし、一卿の学者頼て元
年長日の資と為すことを得たりと云ふ、天
保己未四月、病没す、年四十六、思亭
為の墓誌を撰す、墓に詩すること
協庵は市内の一金の家の商市と云ふ、丸市と
知らるゝ家なり
○須日来藩士陳重協士の五人組制度論を翻訳
して漸く渡り、訳し、翻訳中誠に[illegible]ことを一二
あるが、未だ[illegible]えんに追々ありて、巻尾に
m.P フオレットの新四家論の大略を叙して至き

ない。政治大戦後の人の思想が極端に馳せた個人主義とも多衆主義とも其の極端なる為め契と踏らめるものである。現時の極端個人制に於ては各個人獨立並存して群居するの状態であるけれども、其間に組織的聯合が無いから個人は事実上自由意思の主体なる能力を欠き或は統制無き群衆心理に支配せられ、或は組織なる政党其の多衆に壓抑せられて其の存在を滅却せらる。此契を脱して各個人が完全に其固有の人格を保有し、而も社会と調和して生活して行くのであるけれども、決して真心のデモクラシーとなることを得ない。フオレット

榛原製

は個人主義の悪弊を撤し多衆政治を捨て新出しに新国家の方法は比較団体を経て職業集団を経て其集団を通じて個人を国家の組成員たらしめてこそ政治上に個人の人格を完全に保有せしめ得る。此の如き集団に依て得たる集合観念、集合意思こそ真実に従来集合観念を代表するものであり、投票者に依る代表政治のことく多数の為めに個人を犠牲とすることなく擁護を異にする市町村を設いてある。斯の如く比較団体なる小地域団体を国家組織の単位とするときは従来の如く民族、身分、職業等に依りて公権に差別あることなく、小地域内に於て新を

並べて住居する医師、地主、工場主、職工、四隣大臣米屋八百屋魚屋酒屋書生家令執事小学教員等のごとき異種の階級職業の者を折て一団となし之を政治組織の単位として之の分権を認むるものなることを以て之れを尊重し、貴族、人種、職業の社会的組織を基礎とする偏見を超越し且つ協和的政治を生ずることを以て、其の国体美い平等互に相愛し、各々自他の自営生活の実況を熟知して之を政治上に実現することを期するべく、群衆政治を市町村のごとき大集団に於て各個人が動もすれば自我を誠印せんとかれき弊害をくして集会熱狂、集会意思に外達することを以て、茲に於て四家の如き契の自由を成る政治的団体なるを得べきなり

二月廿五日記

○慶応二年の出版した『佛家新文』と云ふを得たり紙本で四冊の仮日が列せられたる文書に記されたるいかにも「新文」の二字を極敬せるこの時新文が創刊されたる頃で珍くこれから此の二字を結りたのもあらうの志かし文体は多田政治家に従ひたるものかの比家あるも兄人が慧眼のもう日兄人るべくして家が流行らるるが当然なりかの「那」の

二字ハ連続一字となるべ
高浜虚子氏とあるを略して虚子と
の活字を失ひたと又くるこんも新多創刊
次の新多番付に収むべきものである。
○月くるまくしに女人の句を漫る後々漫る
ねすぐれし巧を採るあらず酔か言に
含まるこの酔も閑を生る

子を抱ける身こそちくうんしけん
うつせみの世の人さくらべと良寛

梦の世と梦見しゆめを梦とるる梦見
ぬゆめを梦とこそ知れ　口上

用ゐ捨べ富も猫ちる世の人を形のる

横原製

又ハ空ちるがうし　言道

世一人我とうくちる人しあらば千々のを　口上
しりハつちくんをかし
悔り来る我生言をやき知れ出る犬　口上
ゆ子何典
笑ふも涙こそ世のやれ注きの　蒙物
つ笑ゆる人もあらけり
かくばかり恋しきこころの相思ひ中ハ
離れて知るべうけり　口上
袖の上ハ人の涙のこぼるくハ我注くうる
悲かりけり　口上
あまくれもをむいきくを世の中の月と花

とれまこと向ひけり　口上　遠慶

秋まむの我を待つ者）す　栗山子かな

数々のうき世を飽いた顔もち

振袖いひそこなひの芋に　こうき

我恋の　ふくべ　鶏おすこと　美　夏目成

青葉やふるさハらぬ茶の畑　口上

ものいはぬ我をうつつける会の花

青竹や雨ふる軒の　白雄

夜ものこるこしきを見ん　梅喫きぬ

初霜よ美人の袖に　ちそ　ち羅

菜の香い着の月の匂ひ　口上

年の寄るまもとめてとい　くと祝ふお

櫻原製

うかを山七美人の　盛

里の人ほこおひかけらえ　いかの栗の地を

ほげまはる風のはげしさ　芭江

おんを見もまこと歌をうもさらすうと

梅のおもはんもはつかし　雪山

いざさらば丸めて　雪と身をうして

浮世のかをこころげあるかん　口上

松島の　月　雪　ちてひと

尾花の霜　ちてくらも　乗

人といあ　の　庵の雨　とはす

かとうの島の　の　言　する　金上

さすが梅の桂　の　景　えしーとやあの

あとをふり向けの白浪　左傾

石鼓く素山黒き夕ぐれの入江の火づの色

そまるかは　日上

和泉は蜘蛛の糸ふ咲きにけり千代

解けてあくるの時もしまの雪　菊舎

悔くらしうちうちけり猫の恋もりて多代

われもらじセこの袂のほころびは

ひきけん人をぬうべかりける昔を

かよふあべき身の新あくぶ小夜ふけて

しぐるる為　長ハぬらさじ　倫文子

二月廿七の録

○左傾流の素化（動七手をあくあをめてじある。北頃

南庵が自家宣傳の為めに術策こ「マッチ」を行人に

與つくるが、左流も亦と儀の「マッチ」を欲つことが

が行はれ出して為る兵士ともが行幸ともに受

けて、兵士と悔つて見ると、亦亦亦例の肥満のブルジ

ヨアがやセこけ此プロレタリヤを虐使しもみる

四方があるのびさそハと氣がつくといふ。藥等の

宣傳ハ利らさる所なく、小学校童の為に

途中　宣傳ひらを與へ、動もすると此童

のかくのしいを苦しめ込んだりする、亦まハ例

の月曜廣告を書きつけもみる。役等も

つとめをいふべきひある。素化宣傳もバイキン

移植のこどきものび先人まハ飯り利キ目ハ

が荒い、あさ風、あいいとけうへこのも感染しあいる
限りあり、さて〜危険すること
つまり閑と無しと世歌人の作を浸漬浸
ねすす

けがれなるあくがれあける霧をーも
思ひそもそも月ハすまるける　芦尾
山ともも心の住家かはら後べ
世を捨んこしかひなるうきこころの上
あー丝のかるたこころにまとはんも
思ひとかれぬ世のわのうさの上

橋原製

春ハ武世の人かうめこし　桜よ
誰を思ひ出つらむ　幸五成春
道中に三つの高人きうまたし　殿ハ
くこらぬ大和現　雪山
思ひ居いつくもあるも世の中ハすこと
思ひ居いつくもあるもろうける　雪桜
猫ぞ〜のうる
人の為す業ども　俳一雪の雪　一茶
多くしきをうき世の名に　塗り秋
ぬらりくらりと　蝿を蚤さすこと
もの思ハぬ人の花ハ　和多るも恋の人と　一茶
世なる玉やとも見る　桜妙

六月廿八日記

○廿八、九日、共ニ開催印刷会社の催しで早大野球部出陣部対部員二十二名を招待して両校の試合、清生命の印刷社員も参加し、時の梅雨の湯くたる折とて、世の不景気に泣く真っ赤な嘘ひんぬけの面白の顔ぶれ、流石に喜楽がらぬきである。個様な行楽界愛雖時代大学生と数部対するのを人間と異もひもあろう、或人美味なる感じ、また若し此の様(ひか)、会社の粒々辛苦の結果を割いたとしたら、必ずや氣が咎めるひあるべき筈が咎めるひあるべき早大の先輩つるぐる姉妹会社が、毎年五月の主とする定例とする年々保る すやうな会合 ふ、此際のことさ不用景気の折から差控えべきであらう。然る此の招待状の涙の会社の利益を一般に与へる特典すべきである。清生命会社こかれ乗しも代理会の働きもしてもて得た所謂あを其の関係者と共に敬するのであるから、喜も後ろ暗い点かないの招えた而るに此のる事あり接助しとしたのであるから市民参加の権利がある。主とするものもあるよの努力を與へ一致こかれ、先が一重要事会員と分と研究するのであるから、こんなど洋らか

複原製

の無垢の心を含むこの宴会を催すに当り、新しき宴会こそ
ふ語を応用し得べくんば、選ばれたる場
を会現化と云ひ得るものあらう。選ばれたる場
所は山麓に在り清く市塵を遠かれる所にあ
り、不羈無碍の伝統を忘るゝまいと思ふの意味
あるのもと保健を業とする開涼したる北の地い
保健の地方なるを以て選ばれたるが余の此会
に列する感想であつて、北の宴会席上余
は主人役として市塵に北の感想を述べた。
北の地も同じく西欧の同一環境
にあるが、その陰は早
大の陰も現るゝ時代
の北も出来

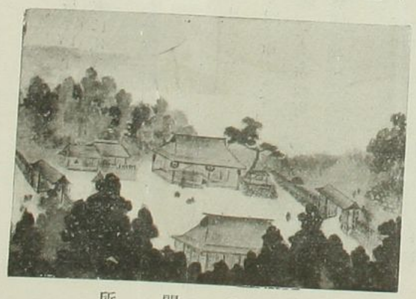
箱根の關は元和四年の春今を去る事三百餘年前德川氏の初めに設けられたもの
でありました。腰物の跡三ツと證文に有つて實際は四ツあつた時は通れぬのであります。

箱根關所

箱根の關繪圖　關所あとを見ますと湖水側に松が一本あります其側に今でも敷石が残つて居りますが之に番所が建てられてありまして正面に座つて見張りますが番頭（はんがしら）と申し兩側に扣へてなりますのが横目役と平士と申します旅行の手形を受取りまして、横目に渡す役は下になります、足輕の勤めでありました。

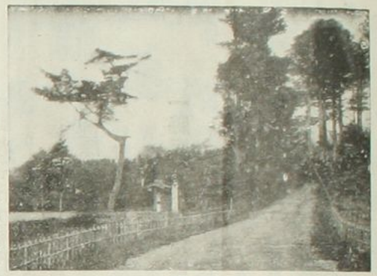
關所定書　定書は元和四年より慶應四年まで三百年間の内三回改正されました。正德元年の定書が今殘つてなります。關所のあとに松が一本あります之を見返りの松と申します松の下に高札があつたのであります。

關所覺書　關所の要害山の事や關所にかゝわる一切の事が書いてあります。箱根町人が舟で薪を採りにゆくにも毎朝關所に舟をつけまして板子



昔の關所

箱根關所



今の關所

箱根の關は元和四年の春今を去る事三百餘年前德川氏の初めに設けられたもので、德川氏は内亂を防ぐ方法として大名の家族を江戸に居住せしめ之等の家族の西の方へ行く事と西の方より江戸に行く武器の通過を嚴重に取締つたのであります。何日頃の事か百姓町人にまで及ぼす事となりました。之が德川氏の政策で十五代も續いた譯であります。今日此等の古文章を見ますれば如何に聖代のありがたさを感ぜずに居られません。弊館の祖先は德川氏の命を受けまして關所建設と同時に此地に本陣職となりまして、(本陣は職名でありました)十有四代に及びました。明治二年に關所は廢されまして、其際に關所の遺物其他一切弊館に藏むる處となりました偶内務省の史蹟保存會及各新聞社の勸誘によりまして今回、三百年間の關所の遺物と本陣の遺墨との假の考古館を設けまして、一般に閲覧を願ひ永久に此歴史を保存いたしたいと思ひます。幸に高覽の榮を賜らば本懐の至りに存じます。

東海道五十三次の内(舊箱根驛)
箱根町芦之湖畔
箱根關所考古館
電話箱根五番

皇太后陛下の臺覽を賜りたる

關所遺物陳列目錄

一大名、士、百姓、町人の印鑑　大名、士、外百姓町人は幕府の指名によりまして關所通行手形を書く事が出來ましたあらかじめ關所に各々の印鑑を屆出して置きます關所にては之を見合はせ印鑑と申します。大名は朱印を用ひ其他は黑印を用ひたのであります。

一大名の手形と士、百姓、町人の手形、往復手形　大名の手形は芳章紙四ッ切りを定めとして士、百姓、町人はハジキラズ全紙を以て定めとして御座居まして、文意も異つて居りました。手形を書く事の出來ますものは大名では家老職、百姓は名主、町人は家主でありました。

一明治大帝御用印及食券馬飼券　明治大帝都を江戸に遷させられました。慶應四年矢張り關所へ御下げになつた御用印であります。食券、馬飼券も其當時宿驛に使用されたるものでありまして明治天皇御事蹟の一の紀念となつて居ります。

一五十三次代官の印鑑　大津より品川、江戸宿までの代官の見合せ印鑑は別に式が異つて居りました。

一關所鐵印、御本陣鐵印、驛傳鐵印其他

一御本陣の手形押捺の金印、飛脚屋の印鑑其他　大名行列の際使用された手形であります。

一多人數手形、印鑑引合せ證、荷物手形

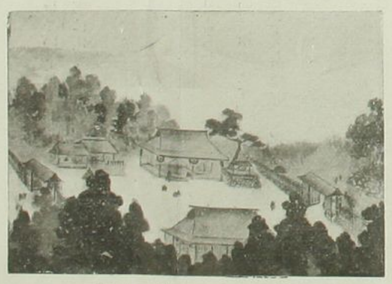
一馬の手形　馬にも手形が入りました。馬を扱ひますものは昔は馬と同樣にされまして馬と同一の手形でありました。

一女通行證文相違覺　關所の定書にあります通り女は江戸より西の方へ行くのが嚴重で女の手形は人相書同樣でありました。關所には老婆を雇つてありまして、女に限りこの老婆が頭の毛の中から足の先まで調べました。腫物の跡三ッと證文に有つて實際は四ッあつた時は通れぬのであります。

一箱根の關繪圖　關所あとを見ますと湖水側に松が一本あります其側に今でも敷石が殘つて居りますが之に番所が建てられてありまして正面に座つて見張りますが番頭(はんがしら)と申し兩側に扣へてなりますのが横目役と平土と申します旅行の手形を受取りまして、横目に渡す役は下になります、足輕の勤めでありました。

一關所定書　定書は元和四年より慶應四年まで三百年間の内三回改正されました。正德元年の定書が今殘つてなります。關所のあとに松が一本あります之を見返りの松と申します松の下に高札があつたのであります。

一關所覺書　關所の要害山の事や關所にかゝわる一切の事が書いてあります。箱根町人が舟で薪を採りにゆくにも毎朝關所に舟をつけまして板子



昔の關所

の下まで調べて貰ひ、許を得て出かけます。歸りには又々關所によりまして板子の下まで調べて家に歸りますと之は關所破りが舟の下などになりはせぬかとゆふ調べであります。此等の事に凡て本書に明記されてあります。

一箱根權現に關する代官の申渡書

一關所通過に關する各大名の古文書

一槍並ニ袖ガラミ其他　關所存在當時に使用されたる備への武器でありました。

一威嚇の面（おどかしの面）　關所役人の詰所正面の上部に掲げてありしものと申します。

一箱根八里の繪圖　德川氏學問所御勘番の編み出しましたもので箱根驛（今の箱根町）の中央より西は皆、江川太郎左衛門代官所の領分で中央より東は全部小田原城主大久保安藝守の領分でありました。關所の平面圖は此の箱根八里の内に御座居ます。

一長持、旗印　各大名の參勤交代の時往來します長持はどなたも御存じの雲助が長持獣でかついだものでありました。其長持ちにつけました旗印でありました此の旗の大小によりまして大名の格式が判るのであります。

一關　札　大名か箱根驛（今の箱根町）に宿泊又は休みます時には何々の守と書かれたる札が關所と本陣と驛の入口に建てます之の札を關札と申します之も大小によりまして其格式が判りました。最も古いものでは德川氏初代頃の本多平八郎で其次ぎは赤穗城受取役脇坂淡路守尾張大納言で最近のは井伊掃部頭水戸御老中武田耕雲齋、林大學頭であります。

一定飛脚鑑札　此は手形がなくとも飛脚は幕府から下げられた鑑札で往來したのであります今は只一枚殘つて居ります。

一早飛脚鑑札　尾張大納言の早飛脚の合鑑で手形を書いてゐるひまのない時に用ひた鑑札であります。

一陣　笠　類　大名行列の時使用されたものであります。

一上洛の繪圖と公文書　文久三年將軍が西方へ向ふ時日本全國の大名を集め一時に御供をさせた、德川將軍の最終の公式の行列であります公文書は此の行列に對しましての禮狀でありまして之も武門政治の最終の公文書であります。

一關所存在當時の金銀貨と金札

一日光御社參諸大名行列順序

一騎馬百騎一卷　各大名の馬上公式の順席であります。

一御東幸矚書　明治大帝御遷都につき御通過に就ての注意書であります。

一朝鮮國王と五代將軍との往復文章

一明治大帝御遷都に關する諸記錄

一箱根戰爭人名簿

一舊　記　錄

一關所廢止の記錄

一太政官高札

『其他略します』

本　陣

一大石内藏助東下り　元祿年間東へ下りし時の宿泊簿で鳥目二貫文但し風呂代共と書いてあります。

一大石賴母　大石内藏助の養父でありまして數回宿泊して居ります。

一大石外衛　大石内藏助の孫であります淺野内匠頭本家藝州公へ御呼び出しになつた時のであります。

一山鹿甚五左衛門（素行）護送の事　大石内藏助十六才の時主君の大命を帶びて箱根越へを決行致しました大石一代の内三大業の一であります。

帳簿には淺野内匠頭預り人下りとしてあります。

一柳原大納言一行の宿泊　陛下の御つかひで江戸の將軍家へゆかれます時の宿泊記錄でありまして此時將軍家には御勅使に對します饗應役が淺野内匠頭でありました殿中の事件は之がもとになります柳原大納言の歸りも宿泊して居ります。

一脇坂淡路守赤穗城受取の爲め宿泊　元祿十四年四月一日城受取として通過の際宿泊されたものて外に目附役荒木十左衛門の一名も宿泊して居ります。

一本陣の圖　大名行列當時使用された本陣の間取圖であります。

一古狸の書　古狸鎌倉建長寺住職を殺し全住職に化け京都に上る途中伊勢路に於て名犬の爲めに殺されました。箱根通行の際本陣に宿泊して書かれたものでありまして箱根不思義の一になつて居ります。

『其他略します』

一箱根戰爭人名簿
一舊　記　錄
一關所廢止の記錄
一太　政　官　高　札

『其他略します』

本　陣

一大石内藏助東下り　元祿年間東へ下りし時の宿泊簿で鳥目二貫文但し風呂代共と書いてあります。

一大石頼母　大石内藏助の養父でありまして數回宿泊して居ります。

一大石外衛　大石内藏助の孫であります淺野内匠頭本家藝州公へ御呼び出しになつた時のであります。

一山鹿甚五左衛門（素行）護送の事　大石内藏助十六才の時主君の大命を帶びて箱根越へな決行致しました大石一代の内三大業の一であります。

帳簿には淺野内匠頭預り人下りとしてあります。

一柳原大納言一行の宿泊　陛下の御つかひで江戸の將軍家へゆかれます時の宿泊記錄でありまして此時將軍家には御勅使に對します饗應役が淺野内匠頭でありました殿中の事件は之がもとになります柳原大納言の歸りも宿泊して居ります。

一脇坂淡路守赤穗城受取の爲め宿泊　元祿十四年四月一日城受取さして通過の際宿泊されたもので外に目附役荒木十左衛門の一名も宿泊して居ります。

一本陣の圖　大名行列當時使用された本陣の間取圖であります。

一古狸の書　古狸鎌倉建長寺住職を殺し仝住職に化け京都に上る途中伊勢路に於て名犬の爲めに殺されました。箱根通行の際本陣に宿泊して書かれたものでありまして箱根不思義の一になつて居ります。

『其他略します』

ハこんまで知らなんだ洋風のレストランがあつて、
らえて、熱ふと、眼前の湖水を眺、四鎖さんし
地眺を妨げたが、一回年を重ねて、麦酒を傾け
和蘭を吸つて、無駄話した時を移して、考へて見
ればこの年、三千尺の雪中の人となつてゐることを
知つた、就寝、環翠楼、桜の花の咲き誇る春敵、
夜の雪中、鶏犬の鳴が聞こえてゐる
その四方の景観に、高い所にあることを感じ
た、滝ふる雪、立ち籠める霧、鶏犬の鳴
くこゝはめぐまれて人家のあることを弁じたやと
地のレストランで酒を飲つて無本陸、石碑が立て
設けた考古館があるので、一回は見て、新しい陳列

複原製

品を一読した。前年無本陸の古文書を
複写したことがあつて、それは
かなり詳しく、実物を見るのは今回
が始めて、思つたよりも多くの文書が保存さ
れて、四五の大きな棚に一杯に陳列されて
中には面白い味をもつたものもあつたが、封建
時代を語る天然記念物の地方文化財
に属する面積の関所であり、無味ある史跡に
ひかれて、家康の創意で、ここに関所が置かれ
たが、後に別に第四番目の間道が開かれ
戻ると、地人になるまで、行旅の人ごとに
監査を受けて、諸戻の謀叛を防ぎ徳川幕

代の面影を保つ鎖鑰とでもいうべきものを思わしめ、
天保年間徳川家に大切な役目をなしたこの人
いまもなお遺っているのである数々の文書に就いて見ると
幕末行旅の模様が窺われて、江戸
入質になられたる諸侯の婦人の通過し幕
府が殊に目を光らかしたかうさまくの控書を徴
することを得ておもしろく感せらるる人数調
べが模様の一條件であるから、姫路の女が
関所に来ると、一人強くて人
数が手形を紛しているとあるとおり通
を許さるるのと祥重であつた。随分程
々の手数で編成の方法関所を通る板ばさみの
模原製

もある。勿論手数料の高で模様の家を優め
ようとする事実あるべき筈であるが、其程に
迄人で繁を得たと例もあるべく
根の関所の歴史ハ
史ではなを過し
を見るにはなほ史的研究味の満々たるものがある。
不完全ながら考古的編纂に若干の関
とふ小歴史を結び得たから、自分の愛と細談
を省くことにする
六月廿三日記
関所の控が多くの家を守ったかを知る
ために過ぎないが、つてある文久年間を記した
一冊にすぎない

文久年中に神奈川の妓楼義亀楼の女房が病
気保養のため娘やR使の女供を連れて箱根
の湯宿に入湯する未だ長とは、一つ宿場の
ことに飽きも来たので病気保養もそこそこと
云ふので、直ぐ行く事もそうとは、箱根の下をお
りて田原に出て東海道(東海道街道)を経て行くよう
は最寄の山道を行けば一里位の道程で近い
から皆んな此節は天下が騒がしくそうして
関所の戦争も武くそうなるから
と云ふので、義亀楼の女房始め一行の者を
良庵から庭番の葛屋を頼び葛屋を
親方、旦家の家柱の談ずるを手根掘の本陣石

内の手代米屋茂右衛門(四右衛門)に相談の上
人を遣り合ひ、分儀の証文を貰ハずに(別に記
した)山の内の関所守りの村々の里道通
行の例に倣り、支役人(名主)と関所定番人
立木定左衛門、内々合せて名主から手形
を貰ひて前記米屋と番屋と手引し首尾
関所を通して直ぐ行き降し込み入湯
してゐた、此ときに箱根の神風楼をたくば
其時義亀楼の肩を並べる位の妓楼
してゐたことと云きこと
から江戸表へ訴へたから廿人大変なこと
となった、義亀の方ハ一人も及ばず、

李良屋と萬屋はいちう」のお勝（とうとし、こんの
家屋敷を上へ引きうつし所帯うつし地面を
買もミのと浮世が出来るかう此が、こんの名は
かうも家屋敷い名主預とうとうとうとう
世俗自然で諸情とうとうとあるが、一方世
手引をうつ米屋と海屋とい世家で閉つとと
付られ江戸絵馬所に入宇とうとう定番人立木
市左衛門ハ罪人代ちうとう新板右の十一屋左助
萬屋博四郎の二人ハ江戸馬
場所の右屋敷ハ江戸所の役人へ巻く隠
居を申付られてうつ此ハ四年後ハ牧つ
て拙ちうがつかうとうとうとうとうとうとうの

複原製

年とうとうと関所の抜が改めうと維新の間際と
うとうとかう一回魚うとうとうとうとあるこんが関
所抜けの後うとうとあうとうとう
もう一ツ抜すべきことがある
向山隼人正（芋村の子）伊豆下田港へ上陸美
うう江戸表へ下る途中、世子屋三郎右衛門正
月二日家来森川勝平と二人うとう新板右の
ち神へ着し社家を数へ京都所司代う
江戸表諸家先中へ急の御用状を冬
関所を通行ちんと右陣石内に赤内を頼
めうと軍艦破損の修理うと下田へ上陸し江戸
此から妻うとう手形を拝受ます、只今

出関所を通ずんとし候、遂に関所の大法なるを、手
形の無い為通のすること叶はず、已むを得ず
荒船から江戸へ、伝兵衛を以て、手形を
貰うたを、雷助屋敷と申者、江戸表御
聞いて、則ち其の者を捕るとの沙汰、差立て其の先
御の戻るまで、右の浦に滞留することを決
し、当一層のこと、横なる者なれば御用状の
其者に対して、呼出し、呼出させ、対する此
者に対面し、呼出させ、対する此
雷助儀を三枚橋に召連れ、右の浦
に泥酔し、右の浦御用状の行方
荒船から引渡し、届出

横原製

るるるを、向山庄屋人、西の翁るるきいるるが大
切な浦用状を紛失させ、上への申訳立ず
と、ふるえ、右浦の一方を捜し切腹せんとす
る騒ぎ、もるを関所の役人、届出、呼
数十人の人足を買上げ八方を捜るるは
此、北滝きい十二の川に落り、所々捜るるも
更るを見ず、金を切られるとるるや、三枚橋
るを或る雷助が、山田原の河原の人
足差の集に落し、ところ、多紀なのに紛れ
と其浦用状、何為るるを河原の柵の陰に
乗せ、去れ、去んとするを、北滝きに心付き
もるること、全く右の浦用状るることが分る

さこと更に江戸人元卿を思ひて、手形を見
あらずして生涯とすべきぞいと
誠に一樹子と言ひつべきぞある
○昔しの旅行は缺く可らざるものであつて、さて五月
蝿とは雲助であつた。東海道中仙道といふことき
宿道を立場くる雲助が屯してみて、其藤
興に乗つて荷物を擔ぎ出すと雲助、
賴らざるを得ざるの比。今日とちがつて自分のこと
き年輩でなければ、雲助を知つてゐるものいない。
自分の幼少年時代は孤後から金沢道中で上京
したが、其頃宇都宮のあたり奏輩の多
くの雲助が旅客の前に屯してゐたのは、まんま

榛原製

ゐたのとちがつて西根を縛して
駕籠を引つかけて帶も結ばず、腰巻こい樣
寒い冬中であるのに、身を纏ふものは單衣の半
襦袢があるのみであつた。其頃は例の唄をうたい
ながらの比。今から十年前こうした前唄をうたひ
ながら、思ひ立つて歌をいふ輩
雲助を俗にいふ時、思ひ立つて歌をいふ輩
つたことがあるが、雲助の名殘ひある輩夫を
こ六十年以前のことであつて僅かに生存して
ゐる二三のうち一人であると吾人はこと

重助の貸銀は毎晩とう一定の極まりもあつたが蚊々と酒手を強ひるが例となつてゐたから、彼れらるのをあらかじめ見越しもゐるけれども、かつは彼等は解きるこういろ〳〵と工夫して種々のキツカケに酒手を強ひる、或は戯かれすかれく或は強く威すことくれ、それを拒めば彼等はすぐ怒る、駆けてゆく足を引張る家の無心に座すめるこれからどうあつても彼等の無心に座することまるる。其の道中の悩みの一つを雲助の強ひりで、殊に彼等は婦女子のことを弱味のあることゝするハ大なる悩みであつた。彼等強ひつた酒手で、有情〳〵やそや酒を煽る、その勢ひで駆け出す、多く酒手を貰つてゐれば無るほど増が増すから酒手を惜まるゝとなれば実は酒は彼等に取つて休で冬期の慰安を与ふるものであるこれあれば、これを楽しみ得るのである。

彼等雲助は漂々として雲のごとく旅を其の家として春夏秋冬を送つてゐれば勿論家庭をもつてゐない、ひとり〳〵で恐〳〵元気で入つまりたるまで、義の分別のあることが家庭を心つた位であらう。まんとうの彼等は義理銭の無頼漢で裏中まるものの後がある

人い時侍をやる、三々五々侍と集まれば大道、
公武と婦侍をやる、見れば奴い横鼻禍まるで
さながらそうもあるまるる。当時時侍の禁制
であつたけれども、雷助の曙侍だけは事公家の
許されてゐるやうなもので、大名の行列の侍えび
さく役茅の平氣なやうい、赤答めもしないつた様
子である。
役茅の常を喧嘩をやる、身体こ生きづの強くる
ことこの上へ。長ものこと士分を喰つてかくり、男の
んることもある。奴が氣を出びあつたことなく、こんも赤
命知らずであつた。今のから考くると役茅の心理も
めるこるであつた、役茅のみがかりを馬鹿扱ひ

標原製

考く、敵数を擬しまてゐたやうな故がある。我
根の考古録こ載りしこれ小冊子こ左のごとき
記事がある
雷助茅い自身を馬鹿と思つてゐたやうん
帯い尻の端に尾の如く結び垂らし、
大名のお馬一疋ひも先棒の者い放屁し
又小便い息杖のまこ立つても お答めい結け
ちこうこ、立場こ着のても、駕籠の乗降
の時このもい、後を向いて走やかんで居るこ
どがお馬きどりであつた。
併し役茅い酒乱癖悪癖扱ふるこ並練
しこ比べまでであつた。彩花の雷助仲間

で幅の利いたのも、此の熟練があつた故である。俗に
いふも八里の峠路、富士を仰ぎ、荷物を運ぶ
のも、うまいものであつた。彼等の長い間の訓練で
足並を揃へた。彼等の歌ふ足並を揃へる合
図であつた。清らかな朝の歌ふものが珍重さ
れ、日傭の男も集がしの美音を聞いて自然
をうごめかしたこの頃の富士の影屋のうめぶ
し弁きこなかなぶしあんば乗物の国又は一ト通りの
ものへ別して早打ちのこと、乗客の流きてみ
る心地もしるへ伝ひが、彼の雪助の解き方が
巧みであるから、乗客の掌を掩はせるとと
きへ伝へくれるである。乗物のことに就ても大名の

標原製

行列とのことき長持のことき大きく且つ重いものが
あつて、これを十人位で解き峠を海の方から
ばうこと、これを足並揃ひ易々と運ぶこ
といは他所の雪助のとも出来ることひとへに高時
の交通れ彼等が欠くべからざるものとさん、陸つて
彼等も自負があり自然我儘を振る舞ひと
こともあるを得ないと云くようである。
箱根の関所は帝時代限があつて、その時を経
ると入ることが許されなくなつた為
を為さるこの門法ゆえ問さ金のと言ひ、一ヨ繋
つて雪助の唐さあつと、実に酒手を貰ひで問さ
金が貰ふこのが問ふ金つた例はいくらもある。

考古的考察のお冊子に出ておる。左の如く記されてある

お宿のお関所の開閉は毎日の朝夕の六つ時

であるが、江戸から早追がきて、上の方へ行く

時は、重助は時刻に間に合ふ様にするが、是

は酒手のかせんでとうるるのだ、心付かて

るいと、時刻を後にするやうにする。又刻限が

るくても酒手のかせぎで、重助の一人が駕籠に乗の

戸をはづして先達てもお関所へかけつけ門

限間際に着くや否やかごの戸をおろし

ま、関所の門でヨイくとかけ声をし

そうして通る直似をしてゐる。さうすれば行

列が後からそのわけで門を閉めるまでが生

標原製

命、さうしてゐる中に、早追が追ひついて来た

駕籠屋に入るるかは生まれる。

とこのことき際どい働きをするのも二重助の稽

略である。

江戸時代の飛脚屋や駅伝助郷といふ制度は

如何が行はるゝと共に廃さるゝに成ったが為めに多くの

クーリー的人夫は職を失つた。実に一革命である。郵

便法施行の御とゝの以前、高島男爵は市時駅伝

啓上に先立ち祝典の為の一使を付かす。函根を為

就て成る時、架空人は互ひに語るやう、今迄

吾々の糊口を奪ふやうな立場をした役人があ

るとかうえんの奴が云ふこゝを通ればは無るで

過さぬと伺ひつゝ何んとか國ん爲に業を興し
人こを救ふ道すがらと云ふ事あり
うんとかうんの男爵のもとに懇願する
つもり。

七月一日記

○國産奬勵の大切なる所以文明の場合に聊か叫
びを興すのもんと此今日は各大工場のヒルムを高セ
集めて宣傳を試むるつもり、時計工場の如きは
一説を加へるもの、時計工場の如きは
で実地を見る必要あり服部金太郎氏
あるとの大隈侯爵
工場を一説するつもり服部は
隆盛に隈なく再来内さんに、工場の大震災後

榛原製

株式會社
服部時計店工場

精工舍概要

（昭和五年五月）

一、沿革

當工場ハ服部時計店社長服部金太郎氏ノ創立經營スル所ニシテ明治二十五年五月始テ東京市本所區石原町ニ設立セラレ專ラ掛時計ノ製作ニ從事セシカ同二十七年現在ノ場所ニ移リショリ懷中時計側ノ製作ニモ着手シ漸次技術ノ進歩ニ伴ヒ同三十二年ニハ目覺時計ヲ次テ同三十五年ニハ懷中時計機械ヲ製作シ何レモ江湖ノ嗜好ニ投シタルヲ以テ爾後次第ニ工場ヲ擴張シテ生産ヲ増加シ以テ一般ノ需要ニ應シタリ

明治二十八年始メテ掛置時計ヲ支那ニ輸出スルヤ大ニ好評ヲ博シタルヲ以テ次テ印度南洋方面ニモ販路ヲ擴張セリ、偶々歐洲大戰ニ遭ヒ外國品ノ輸入困難トナルヤ全力ヲ盡シテ生産ノ増加ヲ圖リ内國ノ需要ニ應スルノ外更ニ遠ク英佛其他ノ歐洲諸國ヲ始メ南米及濠洲ニモ輸出スルニ至リタリ、サレハ大震災前當工場ニ於ケル各種時計ノ生産能力ハ

一、懷中時計	年産高	三十萬個
一、掛時計、置時計類	年産高	八十二萬個

ニシテ一個年ノ生産高優ニ百萬個ヲ超エ其他懷中時計側及ヒ軍需品ノ製作ニモ從事シ尚其餘力ヲ以テ蓄音機、扇風機等ヲ製出セシカ大正十二年九月ノ大震火災ニ遭遇シ甚シク其災害ヲ被リ當工場ハ全部灰燼ニ歸シ根本的ニ破壞セラレタリ

然レトモ災後從業員ハ心ヲ一ニシテ鋭意復興ヲ圖リ大正十三年四月ニハ早クモ掛時計ノ生産ヲ見同年八月ニハ目覺時計ヲ翌十四年七月ニハ九型腕時計ヲ十五年十月ニハ十六型懐中時計及十型腕時計ヲ製出シ以テ漸ク舊態ニ復スルヲ得タリ、而カモ其ノ技術ハ年ト共ニ益々精巧ヲ加フルニ至リ機械設備ノ完備ト相俟テ飛躍的ノ進歩ヲ遂ケ之ヲ震災前ニ比スレハ殆ント隔世ノ觀アリ、サレハ夫ノ堅牢ニシテ且示時正確ヲ最モ必要トスル艦船用時計ト異ナル所ナキ鐵道用時計ノ如キモ亦當工場製品ヲ一般ニ採用セラルルニ至レリ其他近時小型物流行ト共ニ極メテ至難トセル最小型ノ八型腕時計ノ如キモ容易ニ且多量ニ製作セラレツツアリ、カクテ當工場ハ更ニ進ンテ歐米最高級品ニ匹敵スヘキ十七型懐中時計ノ製作ニモ着手シタレハ其製品ノ市場ニ現ハルルノ日ハ蓋シ遠キニアラサルヘシ

二、工場規模

一、工場敷地	本工場	七、七二五坪	計 九、二九一坪
	木工場	一、五六六坪	
二、建物	本工場	七、一九四坪	計 九、三六二坪
	同新築中	一、三九二坪	
	木工場	七七六坪	
三、機械		二、三八五臺	
四、使用電力（電動機）		七七二馬力（一二三臺）	

三、製産品目及一ヶ年生産高

一、懐中時計（腕時計ヲ含ム）	三十一萬個
二、掛置時計	九十二萬個
三、艦船用時計、扇風機、蓄音機等	

四、從業員數

一、職員			七三人
二、工人	男	一、五一四人	計 一、九七四人
	女	四六〇人	
合計			二、〇四七人

(5・5・500)

復興に比類なきまでの大きな足どりを示す

工場でも同様なことが行はれた。時計は微細の機械を組立てるとよく使はれる。懐中時計を解いて見ると百五十程の細かな機械となるが、この百五十の機械を作るのに約二千四百許の工程を経て初めて出来る。実に微細な仕事である。造つた人達の苦心は実に大きい。金属を扱ふことがまづ第一で、針のやうな孔を穿つのである。車を組み歯車をつけるまで百の工程のうちに豆大の金属を扱ふことがまづ第一で、機械を作るのは二十前後の男子や二十前後の男子である。工業学校で習ふのみで、細の仕事もあるから、見て見ると無味なようであるが、なかなか

複雑であるから、全体をグラスプすることは出来ない。従前の「センマイ」と文字板だけの日本に出来ない不一の仕事である。仰ぐべきものである。出来ない機械も全部日本出来ない日本の発明である。優良の大切な機械もあって、商工業の発達するものである。但し北洋の発達とあの無いものもある。北欧は未時計の産業と及ばないと云ふことを少々述べた。

外国を及ばないと云ふことを少々述べた。

の傾向は懐中時計が追々廃時計となるのと、今でも懐中二時計ハといふことがあるが、腕時計は出来ない。腕時計の発明が前例である割合に優

の廉を要するから骨が折れるそうである。ゼンマイを巻く事と文字の数を見る所とは秘密にされて一切さわらせないが如き等も時あれば公開して一般を驚かしたのは仕合せである。この紙人形の考案者は十形の時計を拵えられたことも愛に係せて書きつけておく

七月二日記

日本人は微細の考案に富む手が利いてゐるので時計の発生をもたらすべきである。現に瑞西で心臓の器械を巧みに組合せ得る能力あることは日本と千エックスローバッツの文化とを比べてみる。志かし器械を外国に仰ぐやうでは発明は猶えしない、亦此の器械を外国に仰ぐのも猶えとこゝ

榛原製

こゝを得ぬ。今は発明の器械は日本にもとが出来るまでの事こゝ初めて純の国産とするのことが出来るのである。志かし現在は新工場が今のまゝ新しくなるのである。其心があるなれば其事を現に同じことと会社に人がいくらこのあつた加時永続が生まれ今は腕部が猶上してゐる。開業以来ことしが三十九年といふ。

○今の毎月給料は毎年毎年四割大衆費さまくあるが、えい屋と人を見ると昔しの俗用語のやうなるものが彼等の新合かあるが、其人は臺師とそれいふ以上の権威を有してゐる所は博徒の新合に似た所がある。

共の率くしある能分八[illegible]臺[illegible]負たい、其が他の政臺
党と異つた、其剣の働きをやる、時まへ四法を潜
くり時まへ人と殺傷もする、陸[illegible]臺る行動
を翻弄することで、倭徒まへ似てゐる。彼等ま
八自然縄張りがあつて他の臺が其を侵すと
なると飽まで防衛する此點も倭徒が[illegible]家の
縄張を死守すると同様である。倭徒ハ義侠を
立て前と弱きを扶けも強きを挫くが、赤左童
の稼業する所も同じやうで、貧者弱者ま友祖す
るものである。彼等ハ徒ま方働者を煽動して
其を後援するが、成功することも不成功の
こともある。成ひーるへと人心が去るから諍議ま

横原製

細胞を心
こと倭徒に似てゐる
倭徒を
芳原の
ものとなる
徽衆を
もつて尽さ
と監視に
やり勝負八
なるを
肥る細
と似てゐる

飽まで力を入れる。倭徒ま及べるへと云へる點
八倭徒の親分ハ貸元といふ者もあつて金を供給
するが赤左童ハ爭議の場合ま貸元とうつも後
援するきであるのに、左ハこうまで爭議まで割前
をとれる、北京彼等ハプロローカン位ことを免の為。
倭徒ま於ても賭場の收獲ハ分配さるが此點も
同じことである。倭徒四が縄張りを異すと、其の
全部連衛ハ容易ま行ハれるが赤左童ま於
ま徒ま分同が巣もこ[illegible]けれども、寧つて行ハれ
た例ハるへ。小異を棄てて大同に国徒しに、結
拳ま四中原の高位人今あるこれ、譚ハ分つても実ハ[illegible]

Speculation? gambling?

何人でも役者は不幸の結果の行動に酷似してこんなことに陥ってはならぬべきこと

役者が或る目的を達する為めに会同が必要であるのに、それがそう参らぬのは主義主張が異なる為でいろ〳〵の小功名心が妨げを為すのである。役者は身を殺しても主義を貫くと口癖に云へど、その実は英雄気取りで、皆〳〵童首の位地を争って衆人仰かれたいからである。会童することは、分ことの童首の位地を失ふことであり、分裂して分流がいくつも出来んばかりである。童首は英雄が出来るとなるから、会同の事実成り立たず、分流が追々出来ることは有様、必竟縄張内を己が私有と心得るなどは左傾流としていわるべき話である。也點も生憎

榛原製

悔徒の親分の情況説明を御聞遊ばされ

悔徒の子分同と同じくあるのに、会徒も連衡して来こいろ〳〵蜘牛前上れ奏爾の働きをしてかしニンを義ゐることが関の山である（六月三日）

不思議なことは赤左重の使用する言葉と悔徒の言葉とは仲よく似通ふ点がある、前掌び銭ぐ〳〵すご文があるなどは共通比実に不思議

いろいろ赤左重が其の童首としてみるこの西洋から文盲の徒がまいりのあって、上面の上美や意味の深長の言葉の理解さんるへ仕方にも間違ひ力があって分りかねる場合は悔徒が荒らない野卑な言葉を仕ふのも因は相手が同じ仲間のるべ

山陽翁の骨董趣味

（美の圖所載）

市島春城

伊勢で醫業を營んでゐる西村德太郎氏は賴山陽翁の遺愛に係る一群の骨董を珍藏してゐる。此翁遺愛の文房茶器などの類は諸家の陳列などの折に、一點や二點はチラホラ見受けることもあるが、西村氏の藏品は、數の多い點で群を拔いてゐる。其數實に三十八點と云ふ多數で、それのすべてに翁の詩書が刻されてゐる。唯々翁の手澤を經たものと云ふのみでないから一層面白ろいのだ。私は昨年同氏から全部の寫眞と拓本を寄せられたので、大體を承知したから當時其の品目と多少の解說を「書畫骨董雜誌」に揭げ同好の人に示したことがある。其後同氏は私に題匣を需められ各器を納むる箱を新調し、器と共に去月私方へ郵送されたので、私は爰に始めて此の一群の骨董を目睹し相親しむの機會を得た。

何んにしても四十點に垂んとする骨董が大小十五箱に納められ、それが一時に舞ひ込んだのだから、拙宅の玄關は一杯に塞かり、上は箱を明けるだけでも約一時間を費やした。運搬の途中上は箱の蓋が破損して內部の暴露されてゐるのもあつたので、紛失などあつてはと氣遣はれた。器物の中には木米作の陶器もあることゝて、それが破損でもあつてはとひどく氣にかゝり取り敢す目錄につき合して、點檢を試みたが、幸ひに紛失もなく、亦破損も無つたので始めて安心した。上は箱を取り除いて假りに大合李三個に諸器を納めたが何れも山と積む程の大量であるのに、今更なから其豐富に驚ろいた。自分は其際に思ふた、これほどの多數のものならば、態と伊勢まで立越して題匣をやるべきであつたと。併し同時に居なからにして、此の稀覯の骨董群を玩賞するの仕合せを祝福した。自分は其際に斯うも考へ

た。嘗くの間此等の器を我家に留め置いて充分に味つて見たい。自分一人が眼福を獨占するのは勿體ないから、陳列して同好者に見せたいとも思つた。併し更らに考へると、自分の交はる範圍には書畫を解する人はあつても、骨董を解する人が甚た少ない。人の珍藏を永く預り置くことが危險でもあると感して、匆々題匣に取りかゝることにした。

題匣の折感したことは後に錄するが、それに先たち此の多數の骨董がどうして西村氏の手に歸したかに就て一言する必要がある。氏より聽く所に據ると、氏の家と餘り遠からぬ所に素封家があつて、しば〳〵京都に往來して、賴家に緣故の深い鳩居堂熊谷から、年を累ねて買ひ集め、門外不出として珍重したものが、卽ちこれで、其の持主が世を去つた後に今の西村氏に歸したと云ふことである。私は此の由來を聞いて如何にもそうで無ればならぬと感じた。一つ〳〵各方面から寄せ集めたとすると、筋が自然通らず、贋物などの交ることも免かれぬ。出所が鳩居堂であれば、それ丈で器物の素性に信が置ける。現に鳩居堂の烙印のある箱に納めてあるものも幾つかあつて明かに出所を裏書してゐる。私の鑑定では一つとして贋氣のあるものは無い。全體此等の器がどうして鳩居堂に歸したかゞ委しく分らないが、恐らく山陽翁の未亡人梨影が歿して後、家財の仕末をした時に、鳩居堂が長い緣故から全部を引取つたものであるまいか。と云ふのは山陽の家にどうしても傳へねばならぬ物、例へは樂翁侯から拜領物なども交つてゐるし、山陽の茶の間に日常用ひた雜器の類が累々としてある。烟盆、茶托、茶壺、茶盆箕局菓子器などの類がそれで、文房器も少からずあるけれとも多くは家具調度と見做さるべきもので、それが纏まつて一擧に鳩居堂の手に入つたものと推測される。實は此等の器物は山陽の詩書が刻されてゐなかつたら、二束三文のもので、屑屋に仕末さるゝ程度のものであるが、どんな器にも山陽の詩書が刻されてある所に特色があり、今日珍とさるゝ所以も亦そこにある。自分は拙著隨筆に此等の器を錄した時に所感の一端を擧げて、山陽の遺愛品と云はんよりは寧ろ遺作品と云ふ方が妥當だと云ふたが、事實山陽の作つた骨董が十の八九を占めてゐるのだ。器それ自身に格別の價値があるではない。山陽や其友人の書畫を離れては實は平凡のものであるのに、山陽幷に友人の詩畫で價ひ付られてゐるから、山陽自製の骨董といふ

山陽翁の骨董趣味

（美の國所載）

ても決して誣言でない。山陽は單に自から詩を題してゐるのみでなく、自からそれを刻してゐるのも少なくない。心越禪師が研の蓋に詩を題した大木研に山陽が詩を題したのや、大筆筒に柴栗山の詩のあるのなどは皆な山陽の自刻であることが註されてある。外にも自刻と見らるべきものが數點ある。山陽は印刀を把つて印刻には多少の習熟もあつたから、自から暇に任かせて、自分の詩書は勿論友人の畫などを刻んで樂んだと見へる。私が山陽自身作つた骨董だと云ふたのは此故もあるからだ。樂翁侯から山陽が拜領した野辨當に附屬する錫の一對の瓶子の如き若し贈られた儘のものであつたとすれば、來歷は兎もあれ、それを離れては差したるものとは謂ひ得ないが、此の酒器にも山陽の詩書が刻されてゐて其の由來か識されてある爲めに、此器すら山陽の作と見做し得るのである。全體山陽は骨董癖があつて、兎もすれば價の貴い物を購ふて座右の珍とした。自分は拙著「隨筆賴山陽」に翁の骨董趣味を叙し、若干の珍藏を錄したが、山陽に自作の骨董の斯くまで澤山にあることは夢にも知なかつた。多く骨董を賞翫するものは名器を貪るが常で、自分の詩書や友人の詩畫などを寧閑却するものであるのに、山陽に於ては自家の詩書に重きを措き、それを樂んだ形蹟が諸器に現はれてゐる。山陽の抱負は恐らく人の詩書よりも己れのを優るとし、傍ら友人にも及んだものらしいが、これも一見識で、今となつて見ると、山陽の詩書がある爲めに貴重の物となつてゐる。若し山陽の詩書が無つたら、どんな名器でもその手澤品だと云ふたけで甚た物足りない感があつたであらう。

山陽は人から物を贈られると、それに箱を作つて匣面に多くの場合詩を刻したらしく、遺器の内に一點長方角の花瓶があるが、其の四邊に長篇の詩が刻されてゐる。座右に据へ付けてあつたと思へる箕局には菓子や茶などが納めてあつたと想像されるが、其の上頭の戸には父の春水と叔父の杏坪の詩が刻され下部の戸には自作の詩が刻されてゐる柱隱しの聯には樂翁が山陽の母梅颺に寄せた國風が刻されてゐるし、常に坐邊に置いた手つきの烟草盆の四邊には介石が畫をかき、山陽が詩を書いて、それか刻されてゐるのみか、灰吸には竹田の山水が刻されてゐるなどは珍である木製の茶托は粗末のものだが、それには各々竹田と山陽の詩畫が、合刻され、竹製の銘々菓子盆も粗材のものだが、それも一々山陽の詩が刻されてあり、木米が山陽に寄せた素燒の急須と茶碗は頗る珍器だか、それに堅牢の匣があつてそれには海僊が茶具を書き山陽は木米より寄せられたことを刻してゐる。茶合でも茶壺でも茶盆でも扁額でも皆な木製で、それには悉く山陽の詩書が刻されてゐる。印箱にでも仕つたものかと思はるゝ手つきの器の蓋には山陽の詩書の外に、母の梅颺や室の梨技の和歌や畫が刻されてある。尙ほ珍と感するものは堅木で作つた木地の菓子重で、臺が添へてあり箸も附屬してゐる、此の器にも諸家の合作が刻してあるが、江戸文人の加つてゐることが珍らしい。山陽が常に往來してゐる雲華や竹田や春琴などの詩畫のあるのは怪むに足らないが、外に蜀山、抱一、文晁などの合作があつて、臺の表には北齋の繪がある。個樣のものは山陽の遺器として聊か受け取り難い疑がないでもないが、北齋の畫には山陽の讃があり、著には山陽の刻字があるのを見ると、矢張り山陽の調度の一であつたとも思はれるけれども山陽が特に江戸文人に合作を求めたとも思はれないので爰に多少の不審がある、併し決して贋作などではない。此外に山陽の詩を刻した杖があり、堅木で作つた鈎瓶形の花器が一双ある、これにも四邊に山陽の詩の外に介石景文春琴海仙などの畫が刻されてゐる、此器だけは西村氏より贈られて自分の珍藏に歸した。

此外に文房器では研屏もあれは、拂子もあり、筆箱もあり、香爐などもあつて、皆な山陽の書が刻されてゐる所に精神がある。自分は今刻詩を一々紹介の出來ないのを遺憾とするが、山陽が自ら樂んで作つたものであるから、どれにも趣味のあることは申す迄もない。私は匣面に題するとて、書齋一杯に諸器を陳列し、備さに各器を味ひ、翁を偲んで、一兩日逸興に耽つた。私はこれ等多くの器物の中に坐して、宛がら翁の山紫水明處やそれに隣る母屋に居るやうな氣持がした。私は「隨筆賴山陽」を書いた時に、翁の家居の狀をいろ〳〵に想像をして見た、終には足を擧げて山紫水明處をも尋ねて見たが、東山や鴨水は舊の如くであつても、掛物一幅も掲げてない、明き屋に這入つて見ては翁の坐臥の狀などの想像も出來兼たが、その家庭の調度や遺器を斯く澤山に且つ同時に觀ることを得たは、山陽の書齋や母屋の茶の間などがどんな風であつたかを略々想像し得るやうな氣がした。自分の頭の中で勝手にあの棚はど

山陽翁の骨董趣味

美の奥義

う置かれ、茶器がどう按排され、聯や拂子がどこに吊され、茶や菓子があの茶托で菓子があの銘盆で梨影夫人の手で運ばれたことなどを想ひ浮べると、宛としてその境にあり、翁の咳き拂を聽くの感があつた。唯だ山陽と云へば酒を聯想するのに、酒器の無つたのを物足らず思つたけれども、椽先などに多くの愛瓢が吊されてゐたことなどは想像に難くない。山陽が愛藏した名器は散して諸家の手に歸し、中には珍奇のものもあるけれども、それには却つて山陽の詩書がなく。これはお手製だけに其の詩書が眼目となつてゐる所に、私は寧ろ興味を感ずるを得ぬ。これ等に依つて翁が著作に倦んでは、印刀で詩畵を刻したことも想像されるし、儉素を旨とした翁が價の高い器具を購ふことを厭ふて自作のもので間に合はしてることも分るし、親友と會すればいつも器に詩畵を書かせたことも窺がはれるし、その器物を用ひる都度其器を製した時の事などを思ひ浮べて樂んだことも偲ばれる。此等の意味に於て西村氏所藏の骨董群は翁を紀念するには此上ないものであつて、私は匝面に拙筆を揮ひながら種々の感想を馳せた。

そして一の教訓を得た。それは外でもない。世の骨董を喜こぶものは、一意他人の製作に係るものを愛玩するに偏せず、書畫其他に能あるものは自作の骨董を賞玩して樂しむべしと云ふ事である。

（展會交淡）　雪堂玉合川

○新根に浦ごとに沿革細ってひとぐ衣をいつものぞき
こむが、いつも同じようばかりで、こんどと思ふようなの
のにぶつかる。此年浦々時代に空を未だ新鮮
形を本当に作ることがあつたと、こんまでかつて見かけるこ
とのないから、花の世と変へてみたら、なほ出来ばえ
りかをこのあたりに、会いせ方に一寸工夫があるから嬉つ
と物へへたのなかの行きすぎの嫁入が出て
みたら、ふと二個のたぬきの一個
ハ狭又巻を撮れ一個の何かチョコ提げてみる
四個ぴ一組とするこのだが、すべてれ新鮮が施し
もあつて、ちょうどくに生まれもみるこんなものを
ぬきて出来たこのとこと、嬉しいものと玩具

榛原製

所ろ、かくてみると一寸駄がある。自分はいつも新
根のやうな故跡を訪ぬる毎に感することだが、ナ
ぜ其土地の史跡を因人とのみ心つて来らるへ
のであらうか、例へ心者は名高いようへ
無関所である。今心踊方もうへが国の主流さ
なりとみる、之に伝つて関所のミニアチュアと
心つたら、何人も紀念になるであらう、写真と
雲物も面白からう。関吏に頼べを受けて
みるまでもよからう、別して婦人が女検査役と
頭髪の検査を受けてみる所ろ奥味があ
らう、今日四本津の考古館に就て見れば関の役
所と言はれてあつたぬる大きな面が在れ

のあまおのような性質である、あんなものを小さく模したら必ずまた面白いであらう、北海道の玩具つまり大人の記念品もあるし、西洋の名所などの土地相応の記念品があるのに、日本人の玩具を作るのは殊に長けてゐるのに、なぜ考がそこまで及ばないのであらうか、日本人の発明玩具を等閑視して、小兒の玩具を構ふことは何ぬる構ふことは凡があつて、なぜかおもちやばかりなどを工夫して出来損つてもよいやうな考くらい習があるが、小兒の時から美的の玩具を拵へて美を教へるべきはずの美術修養が出来る筈がないのである

七月三日記

名家の遺蹟その家屋土地などを有形のまま保

標原製

つことは大切であつて、日本でも心付かれて、保護建造されるまで編入された国家で保護してゐるものがある、西洋あるものは別として、を用へてゐる、惜かし日本は枕を文豪の遺址などいふものは保護されないくらひ、兎角自本ばかり文豪を西洋のやうに價つけないからびもある。乃木将軍の家などは保護されて永久に保存されるかも知れないが、将軍のごとく神と崇められるからこれは例外として、けれども神人のごとく文豪などのはいられるとも、其の所在の土地とか親戚縁者、或は門人などその志が無ければ保護され難い、建物などは年を経るに随ひ朽ちるから、保護するのは勿論、動も

すると尼外様と受けることが珍らしく京の京都の
伊藤仁斎の古学の子孫が連綿と続いてゐるから
其の家も存在してゐるのだが左もあるけれども
早く亡びた相違ある。（埼玉県）の越後の長谷
といふ文学者の家もそれ相当大きく出世して可成り富
ろく送式の文庫もあって一種の風致を添へて
ゐる。（埼玉県）の尼の越後北家で出来たものであるから
（埼玉県）双後の文豪の妻鶴子も保護したいと
もある。北の家まで漏れも引へてあり二三代尼も
あり、書物も多く花もあるからも便利がある。宗形博士の廟屋とは全く異
異したゐる。西洋式の四尼の如く其出世

株原製

も名物そして絶まで保護まくきとが越後のことを
除き海の出地まで其の印象も新い。早稲田大学こと
八幡宮の保護者であるけれども、教育の越楽の家
として維持ゆゆゆ相当金かかり、陽ひとり家さあるも
け実現も面倒び、大隈先生の舞部維持と可成其
学してゐる学校市内の雑色がなへもるへの（埼玉）
自分も学校を炉すことを本意とし之いの弦、弦自一
狀況を形つくり、それに全部を寄附することに
つた。多狀況の母和い（埼玉）の事を口にある図書
向上、吸収すると云ふ狀況で永世保護
することを云ふ。（埼玉）云ふ吸かまで他在び現に住
ちそれ先生のある所の寄附をまるも大早計

であるけれども、例の性急の癖思ひ立てば一日猶豫
が出来ず、折角の志ひあるから、言あり任かせて
国の進達を以置る為すと雖も、家人に道達八子
もなく、財産ハ死後不要であるやうなもの、既に拵物の賛であるけれども出来ず、茶に一心
此に義術の為めなる外、何物もなく、異義きに
ハ去稀の紀念なる清劇傷物を設けれ時も進
人に私財を投じ、家宅邸宅をも公の附をし、八方又此
茶がある。斯る能いしい身後の仕末を為すあ
が茶友人中にあることハ茶を等もしも感服に値
さらしむるものである。行く〳〵数多き若書
の校撰をも此の歌国と宮のちんとして遺言書うも

記してあるといふが、その日所得ハ傷し印定を維持
し得るもあるうる保し 四証の保存なるが此の歌国の
日印ひうく名を明別向の上今と命もあるるを、
向上の力めるきハ文方義指を仰く必要もあるの
で、尚ほ南ることの程力を改さ拵べうるあることハ云
ふまでもなく

七月四日記

○此度稀也複雑人なる人の見あ面義次印方と拵
かんれ拵あ面るも示されと国書の面文様の年刊
行さんと法字的の二種の国書があると

七文書目　一冊
叢求　三冊
法華玄義序一帖

此三種共に殆んどいまだあるも。古文孝經は市販本唐の舊義及び此書は後に復刻されてある。文祿
に敷版があると云ふことは記載があるが果して何
人の者か云ひあるか分明でない、此の四古文古經
の標題は森立之の著書に勅版とあるけれども
始り紙をしも云ひ剥がれし形跡があるから
之れを勅版とも云ひ得ない。蒙求の例の横廣
うの本で敷版の内の南庵の名も刻されもの
で、法華玄義序は極めて短かい文句が弱る
祐觀のものである。
る著作と認めれば要跋羅尼は四種とも集め
もあつた。其内二種の陀羅尼は也も短文で極

樣原製

めて複雜へが二種まであつた載せそこと二回
は版式が異つてゐることを知つた
あ田は今村あ三の芸集した銅印を始へ
れとそこ三る五十數種を出し云された。
此内の五十數種は漢印の元あ
のものであつたが中まれ小さい住印も
あつた。
日中光數位が自ら錄した古經數跋見れば二冊
冬冊
百枚程のもの二冊で伯自身の書留めを寫
寫したものであつた。そこで豐前に收められてゐる
龍者の名ある注されてある古經研究に參考
とするものに古芸的表る此の輯録

の方を考へて取られたとある。
此の挿絵は樹木を主体とした図案の図案
在る事二分の一（詩歌八分の一）があつて、これに拾
遺八、巻尾に刊誤を西しに表が三枚（六
頁）附いて居ることで、和版まは個版のもの
あるのは実に珍しいことで、享保版
の版ごこんあるのは極めて高価と感じた。
此頃年の文化萬治版と樗陰のある玄原細見
図を自分持ち行き衆と研究した所が萬治
と表紙に樗陰しとのは、図面の中に萬治元年
と刻してあるので草字萬治刊行と思つたら
しいが萬治元年の下に開創とある様な字が

横原製

あつたのを刻つて別に無理矢理に字を入れ
たらしく、萬治版ひろめことは確かである。玄
原の暦に焼けて萬治元年まで今の地に移つ
たのであるから、此の細見図にあることは無
なる筈はない。時代はハツキリ定まらぬが元
禄の末頃のようである。
○蔦屋重三郎が京まで出て、身体の仕末に困しむ
しゾンとなつた。例年は絶筆の執筆を五十日の
間遅くして毎日をまぎらすのだが、七年も其の例
に従へべきか、扶助が居ない、毎年の例にある
のも一案だが、元公扶助
毎日考へ強筆の為から、扶助をとりそこ

なほ日を接き出しそうそうとおもうるあ
ハ方の五十日位はしかうの、二三念入りの出来
がちはんぶ一冊の絶筆となり成り畢るやうの思
ふ

七月廿日記

頼山陽断片

俗歌の高調

山陽と蘭醫

揺籃期初稿

山陽の遺墨の題跋所感

風景と奏樂

歌集山人の追懐

榛原製

大隈侯文故補

後世餘興

第文故

餘味のある詩句

沈思

文故八景

ポスター集を作る

ホートンの思出

日本多ロビンソンクルソー物語 南洋紀行

大西郷とパウル

獄中伴ひ印と影

ハンターと光悦

書物の裝釘に就て
吹上の話 呼出し
小野田羽陽
佐久間象山の春秋命辭準繩
國際聯盟の解
酒と人
土
流書の秘密
家庭と母
日本庶民の靜勢
村上吉野師
富士郎

東京製

促織經
百歌の反印
山の思出
家の思出
赤化者と傷徒
納豆
森有禮くとき
若根と雷助
古狀揃
歌敎の年
柳合孝
河豚

徳川時代の風俗語彙

江川坦庵と茶道

西国三志伝の稿本と慈雲

韓山子翼毛琉の稿本を得た

能登に旅した

茶家の西洋業

玩具や品を見た

畏怖の経験を問いた

俗名新兵衛二種

無駄退治

遠生四説

魔姫ドリアン

清水尾和書書簡

木下杉菊書簡

下村観山

城杉西の石碑名詩

ガンバレー

ミーハス

維志国を訪ね

四国豊城

寺崎廣業

旅行は汽車の延長義

思亭人生

私の名の今昔

芳香と術策の達人　外交通信
英雄三天
心意の湖畔を歩いて
金山行紀
中将姫と楊貴妃　其四
緑身
日光と増上寺以外人の入りを許さず
金身釋名の高宮
美人の乗り物　志賀
山と酒
屋上登攀
庭園余話

原製

漫画
霧降山の女仙
書生気質と英世
登山の日向
献盃
酒と政治
おくう夏

○酒の川柳を集めたものを清女二三を掲げす

しはいやつ衰ふ酒に計う酔い

酒呑の耳を突めく鼾の影

雛の酒蓬餅でえべーかえる

綿入い呑んで酒着る男あり

神代もびますすみの酒が嫌う

居酒をば仕くずとむごくかき

○金長屋海田の書を寄せ徒で騒ぎ蔬菜を書き一句屏風を軸にするを喜ぶし来る書書面ある清海の筆と改田を立て、別に雖ども、一句を称す云く

我長野雨撲、也似老農家 市歌往き

標原製

素北歌往黄氏今年多牧蔵 北向

俳句論 老海并白口

○亀の脚面は去秋後三年も未てあたらず往々の逸話を知ってあり殊に高麗と日書を学んだこと又就もいろいろ知ってあるが、柳亭種彦もも脚翁のことを少くのは珍である、種彦の人の吉いと陶業でもあるとと思いて雅俗筆とは又左の逸話が知してあると、古川倚の脚論又載せてある

二師柳翁論なく、脚翁のもとに書く つかへし男、一の未もも、今昔とも大福弁

の接待をはじめとす僕が者のを
行脚の乞食者きを知りんと待ひけん
バ易きなるのなりとて やがて大福餅と
書きなるが、家形意こちら いず、且件の
男をはして心をしづめ、我が者き試
みて、其夜一夜か祝工夫と書しかくう
じて書き得なりけん、明日遍くけるん
易大く歓び、其夜変りて出でつ、彼変化
者とあるく宮、城るへ出行脚の文字のれる
らさるを知り、いざく北鎌倉宮へし、行
脚の紙を剥しくんとをひ料を二貫文
許りの餅を金るを迄、易く北鎌倉の出を

得鬼の首級をうけ忘れしも恨みぬとも
高貴にあるうきを利を得なり、さもあれ
仏法の風の出なるを大福餅・・・
世を経るまで、時なる又一時後
んて者きけるが、其文字化月山の三あるを、
いかなる振りわるきを宮形文字、宜しと
おもふるの出来ず、苦労して切なるを辞み
終れかいず、苦労後なるの費れを又なる
けるが、化月山を者きなる文字一種あるけ
ることを其中まで誤んなるを探み、郷を用ゐ
しを、今はまさ外人の第一のを掲けなるいか

與太から出る眞

川端龍子

ある展覽會の挿話。

そこには某大家の「義經と靜」の双幅が出陳されてゐたが、遂に買約に成らずに仕舞つた。處がそれには理由がある。その理由たるや、製作の價値は寧ろ第二義において

兩人とも、落行く先が分らない……。

つまり下落一方のこの不況時代の、落付く先が不明では――に引掛かる御幣擔ぎであるさうだ。まことに作家側としては啞然たる理由である。だが然し、製作が賣品と成るの場合にあつては、買手にしては金を出しての實際問題である。貰ふので無い以上、そこに恁うしたベラ棒な緣喜を擔がれるにしても、如何んせん之れは先方の自由といふものである。從つて豫期しないケチをつけたにしても、苦情の持つて行きやうも無いことだ。

それにしても此の緣喜といふ奴は、今に始まつたことで無いと同時に、或は將來も――と云ふよりも、人類の生存と終始する厄介な地口であらう事だ。无論日本畫の圖柄の上にも隨分と結ばれてゐる緣喜ではあるが、一二の例として――脈がられる方の側では、

生えてる筍は子孫繁昌で瑞祥とされてゐるが、堀つた筍を靜物にでもものにすると、反對に之れは子孫の根絶しで禁物だといふ。龜は萬年の壽、目出度い方は誰れも知つてゐるが、それが投機仲間の側からは、手が合はないと嫌はれてゐるさうだ。藤も勿論下がるで駄目。鳥にしては四十雀のしじう空財布。日の出も金泥描では、金が日に出る、――まるで濱口内閣の鬼門みたやうな擔ぎ方もあるさうだ。

富山で發見された西郷隆盛の眞影

大像（西郷隆盛の眞影）は全くないといはれてゐたが計らずも今回富山市今木町自動車業山口藩三郎氏が京都の縁家先から鹿ノ子きの公子と云ふ婆を引取つた處其の所持品中より寫眞の如き本物の隆盛の寫眞が發見された、寫眞の裏面に書いてあるのを見ると神戸市三の宮驛で買求めたらしいが此の他にも幾妥のものや島津公等の珍らしい寫眞もあるとの事である

さて、一層そこまで來ると、航空船でも描いて――景氣上りつ放し――などは、きつと喜ばれること請合である。嘗て關西に藻刈一鳳とか云ふ作家が、儲かる一方で大にモテたと話のやうな話があるが、世間といふものは存外に他愛も無いものだ。と云ふよりも藝術の鑑賞が、まだ〳〵第一義では通らないといふ事なのだ。

處で擔ぐのは愛好者側ばかりでも無いことだ。作家には又作家らしい擔ぎ方もある。名は洩らしたが帝展の出品者――何も帝展の作家に限つたことでは無い。何處へ出品する作家にしても、出品者としては落選の赤標は大禁物である。從つて鑑別發表の間際と成ると、兎角に赤いものが氣に成ることで、――妻君の丸髷の赤いてがらをやめさせる――街を行くにも赤煉瓦の無ささうな通りを――といつた調子で、某なる作家も發表日の畫室には落付けずに、結局は吸寄せられて上野公園に足が向いたのだが、そこでパツタリ眼に入つたのが、兩大師の朱塗の高札！

无論落選であつた。それ以來二度と再び、兩大師の前は通るまいと決心したさうに聞いたが、さてその後はどう成つた事か。

標原製

○東都護利寺ニ影本（今京ニ四郎配本）として一百
萬塔陀羅尼小巻十本を納めたる一函を始
り来る、百萬塔ニ納めたる陀羅尼ハ根本、相
輪、自心印、六度の四種あるも、六度最も稀
也、六度の外の陀羅尼ハ文字の大小二版あ
り、亦法隆寺ニハ鈔本自心印陀羅尼二通
あり、相輪陀羅尼一通あり、計十通あ
て複巻一函ニ牡丹ニ附せるる塔の図と識
説とを以てす、鈔本自心印の一ハ八月廿日〻延とあり他の
一ハ大湯坐千回と書す、この宮殿生ハ正
八位故文書の寶龜四年十月二十九日の奉宮

橋原製

一切経所解の宮生連名中の人名也、相輪
の巻末ハ七月廿五日の去写品の書名かな
る、四種の陀羅尼ハ表紙巻首の字ハ
「一」「二」「三」「四」の数字印刷してあるを例と
す、即ち根本、相輪、自心印、六度の符号
を表紙とせる失ハれ存せるもの多し、
北複巻の原本ハ法隆寺の発見ひし様り完
ハ、まへて四種を存ず、印刷も紙質も原本に
近うて、複巻者の宮しきを得たりと定
す、

七月七日記

○伊勢四郎清津、西来寺に於て天保十年刊
行の法華経あ樂行品ハ稀れある石也

此経宋の張即之の書を贋補し印に刻す
る所の此経の中に就て鈎摹し漢美面書
を附す、即之の書拙めて拙也法書と為す
足る、宋淵言に就て校勘し精細の考証を為
すこと例の如し、其業は常に此の学問の恢
弘に感ず、宋淵なかりせば此経の維を刊し
得ざる也　七月七日記

○山村耕花来訪前日揮毫を依頼し居る大震
災紀念帖に二枚書をものしぬ、話す時
の恢状を図し居る、耕花震災当時谷所の焼
況を討ね報知社の為めに図し居るなり、大
正武花鑑と題し出版し居る冊子乃ち是

標原製

れなり、余当時此書の序を記す、今期を
て又る二十枚に無人とする国を収め、谷岡に川村
花菱の記あり、是帖と共に当時の紀念となす
足る、山村又玩具一を贈る、延年の木の芯にて
山村の表を刻くりたるものにて雅致あり玉元之
れを玩具架中に置くという　七月十日
○大河内桂園は高崎の城主なり、曾て渋川橋
畔の住す、余に附近に倭石一日夕[illegible]桂園
を訪ふ、門内に砌あり庭に日の亭謝風流の趣
あるを見て其主を想見し、而して其人を知らず
亦其の家に入らず、今は恍として梦のごとく唯だ
其の荘の主人の大河内高倩氏なることを記

まるの多く、殊若多くの図寺を発見す、之の筆者多く、通例大名の筆跡を異にす、北人国十郎を京都に於て見たるに、雅楽と交はることなりし、其の筆跡の性質さるも如何あるかを、今日偶と神田の書肆を訪ひ、桂園の筆跡を見るや、花中の摺物、鈴墓歌文房具を買ひ、之の二冊あり、鈴墓歌の筆跡は、殆ど之を特多分錦歌の筆跡に酷似す、桂園の趣味の深き推知、これ亦見るべし、桂園の趣味の深き推知せらるる、余往年門を叩きて、きて想像せらるる今日前と同事柳園池を見るの思を為す、外と浮世絵一冊あり、皆東都婦人の

風俗を写せるものなるも、なかなか業と神あり、ずんん絵のの及ぶ不こあるべし、巻尾に夫人の桂園の跋あり、それに信りそのの婦影本二冊を桂園遺稿と題し、乃ち桂園翁の跋と署し、浮世絵を月八の誌

○良寛絵の小倉中の図寺と身を寄せることは落のもるの事実なれ、それを紀念する意の良寛の詩を摺り刻し、建設する会もとりかからあるべし、北陸赤国寺駐錫の時と、この絵跋しとかを研究するものあるべし、それ

境内なる一堂衆寮であることが知れて、その堂を良寛堂と名けることもあるが、世の言葉を以てして来たるものがあるが、衆寮の名分を失ふものとなしたる所である。

○鈴木氏亨といふ人から通蕎麦の一名酒通といふ道蕎を以て来たる金の酒の説を二篇収めてあるのである。採録して以て来つたものであるが、酒の名は酒の名人なる酒の名人なる酒の名人なる

す時、志賀の邸より出会ふと、貴公の酒敵の弘道であつた。自動車の中で蔵書を拡げて拳を闘はすやうな面白い人であつた。北海道に赴くとそうそう、数々祝宴を張るとそうそう東京に帰るとそうそうに、伏賀人で先賀する引立てられた。先賀の国民葬まで貴公を主幹として、北人が貴公の片腕となつて扶け、大衆を納得する術を講じた。

○その銘せる数、果して陶器良寛は一基を賜はることとなり、忘れず小宮山雅園の尼る所也、祖師堂に良寛の駐錫する倚中玉峯国寺に生んだ因縁、数年前城

横原製

後の狂形浄の心りとなると面貌酷似す善同し首図源を掘りとるとうん陶器の方軟か味あつて優るる似とする。

［聖僧良寛］

孤庵獨座像
（百年忌紀念）
小見山雅園謹製
高サ五寸二分
桐箱入金五圓也
送料内地五拾錢

○前の神田の書店を漁り一冊の書本を獲る
和歌俳句とも幾ばくかあるべくして之れを缺く思
へども人の見落すらんも亦自からあるべしと
偶ま閑を得て乗じ俳句和歌詩詞等を
谷書に見まし迄はしてあれを脱する能はず
をわるに頃る甚心す、西徐計廿年後、暑して
春風漫奥といふ

七月十日記

○日本の春任侠流と高なる南洋のサイバン
島をりて視察して人の話に土人の
酒を嗜むこと甚しいかさる驚嘆し知約に
堪へざるものあるを欲まさることが出来ず邦人
ハ氣の毒がつて盗ませる者ありおい酒を出

標原製

して置くとあるから我と云ふ者が男
兄まるを出つてはなる罪かるべく事人と四刊が
あるものとしてあるといふ。酒を禁セさんバ絶次から出来
ぬるなりあんバ枝ぬ、さる直義のなへの拘子
定知で之れを禁まるるといふ、人道を糸セさるる
ルと云つてみる。北島民ハ従順ひ氣を好まるへ
が保しめて強かつておるしることをする役等ハ
往々軍丸の一つを抜きさる。○婦人達ハ其の勇
敢なる思を宮のるるあるもあるべく男子四士豆峰
をする強えるへ見るもの、軍丸を出セといふ出し
又七を一九が無いと云る者が強ひ丸の倚かるあ
ハ降参と極めまつてみる

○此度は四度目の富士前田嶋山から白馬山登攀の懐舊談を少くとも時々の流行四十四年頃登攀の目的は高山植物の採集であつたが十七年このかた登山ブームの種の便利が開け山禁の村民は登山者を歓迎まで歓迎するようになつたが此時はまだ登山の既に衰が理解されず、東京から洋服を着て来ると山が祟るとて村人は山の案内を拒絶する決議をしたやうな様子もあつたが、そんな譯はないから人を頼むも人夫を雇ひ受けがなくなる辛あらして頼んでやうやう仕末をつけた。白馬は山が雪と草と岩ばかりの荒かな白馬の姿をつくつとみる

ので白馬の名がある。最初白馬と云ひて暴雨が降るのが誰も知らぬ。登山の時は雨が降ると云ふ者もあるが、えゝ困つた、山宿まぐれ山中の小屋も山屋上ると雖も来る所が流れ小屋を侵すのが、そんを避ける為め方向を変ずる設備をしたが、夜は睡眠中に、その設備が破壊してどうにもならぬ。一同は自棄になつて仕方なく、そして僅かに身を以て免かんとやうの仕末、兎角所が雪りをなして、常ならへ川が出来て面白く流つたが、そんが嶋る事の危険と道程は。

その比信州の某谷の校の小使い勝る山猟の比男び
あるの見、踏み込みしを流流と捉ひ、幸ひなぬ
なることでなんが敵のんなが、流寒さに女男のからだが
こごえて、引きつるを、比るく眠るのを、美を女
使ふ任かせば見れば凍死するのを、美を一里でも抱く
て下る金中ハ、ツラウとも叫びもしても眠りを始ける
よりいが減男が折れたのもう一人金中で寒氣
に男さえも等眠状態に陥入へたことがある。これも
凍死の前提であることが知れるのをこれを眠
らせるハやうに千尋をするもよいが減男が折
んとも大抵こんなことで義命するのである幸ひな
物は炭焼小屋があったのの炭があつたの

標原製

で、美で暖をとり、一回無事を得たが山の寒
氣ハ雨雪の場合ひとしきりも時天の時が一番
ひどいもので、好天氣ハ却つて油断がならぬ
ある地點ハ白骨が無数に散乱してゐる
之れを目標としてみる。何年以前に六郎が登山
山して凍死したのを、片つけるのを忘れて、村と村
とが境界を論じて、美ハ我村の地域であるへとも
ひと争ひをして、美の使片付かず、美が供え
境界線にあるので、目標とするのみならず次
第。高山植物ハ珍品と採集する人ハ随分珍奇
なものとく、或る位物の少ない校の教員
ハ此の採集の熱心家で、高地と深山を採集

して数る山中を過つてから、例の村人なども案内を乞
まるほどにから、ほんの地あまり面倒者や人夫がいつしか
○飛けまつたのだ。已ちろ〳〵北の教授は善心し
て橋を渡つて、山すそ沿ひの地蔵堂
迂回して、元から橋き渡るとく〳〵ばけの夢を
自分から前を実現に往復したやつと全部
を山下に運人だといふ苦辛談もあると語
つた。因て日本アルプスといふの名は誰が命じたと
最寄の人に聞いたが、えへアルペンストで有名なウエス
トンが初めて跋渉して新しく名つけたのだ。邦人が
外国案内から名つけたものだ。
七月十二日記

横原製

○廛山まであるきと感じて其の絶景を
等閑に附する、風流の地でない其の土地のものは
何とも思つてゐるが、他所のものが鑑賞玩する
のを何故かと怪しむ。あすまあるの大和の月ヶ瀬
でハ梅渓を以つて天下の名勝と云はれてゐる
が、土地のものは云はせると、何千何万の梅樹は
と梁利の為めに乱伐されるが、観賞の為めの
ようと結果、土地ひいては風子梅樹を用ひられ
とばかりで、一時の盛んな切り倒して薪材とし
て他に出荷するから、四の方美
を見て東方絶倫と賞したことと思ひ

保姉今ようやく見かゝる出来とかゝ梅酒の試験を土地のうまい理解せしむるの可き異が折れとこゝ。彼等は因州の人にて何れも梅花を珍重する、見て郷土嗜香浮動を説いたもてなすも、梅うの香を嗅くは梅花のまゝ北地の梅は樹数かゝるいかゝ、一里二里隔てうゝ京からも香が来ること説くと、見へ不思議に考等は北地土地をみても一向香を知らぬと云ふ北とあるを知らぬ心感じぬと云ふくさ梅の香を慣るこのが悪臭を感じるとこゝ養原を仕出すると月十二の記

標京製

○新義田の富義次郎伊尾遺跡の天八木布袋を拾く来り余に題面を請ふ乃ち書して曰く、北什もと六如上人の孫義之六如の銘を刻すこゝく

輪囲異材　亟彫亟刻
本来面目　天地弥勒
六如英南

保の尾れ左の演説を刻す
天明丁未夏立
六如上人　脱
南無仏
拓　尾什

明治名家の遺印譜二十冊 加人原寛氏
の口拓幅を度し一々模刻を写す、
清国南部の漢文書牘一通を得る、北清
紳士より送り来りしと云へ
く、也隣市日本豪刻家を評論して
其の妙を得、蓋前段出品と云へど未
だ北清の事態を詳かにせず
○新聞紙で英国家が国漢書を学人に送の事故を
学へて又彼が知る人が無かつた、村路氏左の手紙
を寄せられたが、これも五六家と思つた、氏名が
自無へ、志めし何かの材料にも可ることこゝ
牧めて写す
青書 [illegible]

標原製

（新潟港）

諸國御客帳

（大坂船宿）

三國屋金兵衛様

寶久丸

天保七申年八月十一日入舟、仕切に有。

住吉屋貞藏様

天神丸

天保八酉四月十六日入舟、同八月十二日入舟。

白山丸

石崎德右衛門様

宗、四郎様

天保十二丑四月十五日入舟、同十五辰二月廿五日入舟、弘化二巳
七月十二日入舟、文久三亥二月十六日入舟、仕切に有。

住吉丸

同 德右衛門様

天保十五辰四月廿三日入舟、廿七日出帆

權現丸

同 惣治郎様

天保十五辰四月廿三日入舟、嘉永二酉三月七日御入舟、　德治郎様
同五子三月九日入舟、仕切帳に。

神昌丸　同太兵衛様
惣治郎様

天保十五辰四月二日入舟、仕切帳、嘉永二酉三月七日入舟、
仕切に有。

愛宕丸　同權藏様
三右衛門様

天保十五辰四月廿三日入舟、嘉永二酉三月十九日入舟。

壽龍丸　同勘治郎様

天保十五辰四月十七日入舟、嘉永三戌九月廿八日入舟、
仕切に有。

神德丸　大西甚助様舟　源七様

慶應元丑三月廿二日入舟、同五月十九日入舟、仕切に有。

勝德丸　同　德治郎様

慶應二寅二月廿九日入舟、仕切に有。

豊德丸　同　豊治郎様

慶應三卯九月十二日入舟、仕切に有。

幸德丸　同　與七様

慶應三卯七月十三日入舟、仕切に有。

觀音丸　淡路屋茂右衛門様
今所德右衛門様

元治元丑三月廿六日入舟、同五月十八日入舟、仕切に有。

寅吉丸　今所
同寅吉様

元治元丑三月廿七日入舟、仕切に有。

榮寶丸　　閼瀬屋佐右衛門様舟
文政十三寅五月十四日入舟、同八月二日入舟、仕切に有之。　市之助様

大寶丸　同　　嘉加七様
文政十三寅五月十四日入舟、同九月十日入舟、仕切に有。

長生丸　同　　五兵衛様
文政十三寅五月十四日入舟、仕切に有。

海運丸　　小川與三右衛門様
天保十五辰五月二日入舟、仕切に有。

赤山丸　　鈴木屋助治郎様
嘉永二酉三月廿二日入舟、萬延元申九月十二日入舟、　祐藏様

明治十二卯四月十日入舟、仕切。

柏　丸　　同勇助様
萬延元申九月十日入舟、同二酉三月二日入舟、仕切有。

小平丸　　同兵藏様
嘉永八卯四月十二日入舟、仕切有之。

太福丸　　越前屋傳治郎様
安政四子四月十日入舟、文久二戌四月十九日入舟、同三亥五月十日入舟。

龍天丸　　小川屋惣吉様
安政二戌二月十六日入舟、同七月十六日入舟、仕切有。

長久丸　鍋屋長兵衛様舟　　半左衛門様
嘉永二酉四月廿四日入舟、仕切帳に有之。

長榮丸　同　　万七様
嘉永二酉八月廿一日入舟、三戌三月二日入舟、仕切帳に有。

長安丸　鍋屋長兵衛様舟

嘉永三戌五月廿一日入舟、同七月廿一日入舟、文久三亥二月三十日入舟、仕切有。

嘉助様
嘉兵衛様

長久丸

明治七戌九月廿七日入舟、同八亥二月十六日入舟、仕切に有。

中石崎倉吉様

龍宮丸

明治七戌四月廿日入舟、仕切に有。

中石崎友太郎様

榮重丸

明治三午四月十九日入舟、後より仕出す。

三國屋小左衛門様

吉祥丸　苅部藤藏様舟

伊藤彦七様
知工船頭廣吉様

明治十八酉九月廿日松前登り瀬戸ヶ嶋へ入舟御約定仕候也。

一乘丸

升ノ本三左衛門様

明治十四巳六月廿九日入舟、同十八酉九月廿日登り御入舟。

三九郎様

港町通り一ノ町拾六番地

前田松太郎様舟

春日丸

明治十八年十月三十日御入津。

金谷新吉様

荒濱浦　牧口庄三郎様手船

北星丸

米屋彌五右衛門様

常七様

明治七戌四月十八日入舟、仕切帳に有。

明寶丸

明治十七申酉六月廿五日入舟、仕切帳に有。

同七三郎様

與德丸

同運治郎様

明治十七甲十月廿日入舟、仕切有之候。同十八酉七月十六日入舟、
同十九戌五月廿日御入舟。　　與五平様

亀通丸　　同運次郎　常七様

明治十三辰七月廿六日入舟、仕切有之。同十八酉七月十六日入舟、
同十九年五月廿日御入舟。

明悦丸　　同牧口久治郎様

明治十七甲十月廿日入舟、仕切有之。同十八酉七月十六日御入津へ
同廿二年四月七日御入船。

永徳丸　　牧口庄三郎様手船　　米屋長助様

天保十二丑八月二日入舟、同十三寅七月十二日入舟。

榮徳丸　　庄三郎様舟　　牧口平吉様

明治十五九月八日入舟、仕切に出し。

大神門榮丸　　牧口改三郎様船　　木南仙之助様

明治十八酉九月三日御入津。

愛染丸　　牧口庄三郎様舟　　小松七三郎様

明治十九年五月廿日御入津。

（海事史料叢書第四巻二八五頁より二八九頁マデ）

抑既今新潟市編纂用中「長岡史料」「新潟市史」「新潟市史」「近刊」「海事史料叢書」中に「清国御密使」と云ふもの收録せられ、同書は解説によれば下記関係の海産を買収の為の密使の行動を記録したるものなり、其中に「新潟港関係のもの」を抜萃し別紙に出張の節に御目に掛申度、或は既に御著述かは存じ申すべき事御参考迄に差上げ申す

七月十日

市島先生 侍史

[illegible]

新潟市史編纂部

標原製

閲覧室

複原製